Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-03-14

周偉洲「吐谷渾墓誌通考」（翻訳および解説・附録）

村井，恭子
市来，弘志

(Citation)
神戸大学文学部紀要,48:147-187

(Issue Date)
2021

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81012691

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012691

周偉洲「吐谷渾墓誌通考」（翻訳および解説・附録）

村井　恭子、市来　弘志※

解説

吐谷渾（とよくこん）とは、五胡十六国時代に鮮卑慕容部の一部が中国東北部より青海地方に進出し、チベット系原住民等を取り込んで建てた王国名および複合部族集団名である。吐谷渾は中国の南北朝時代に、青海からツァイダム盆地を抜けて西域に至る「青海路」と呼ばれるシルクロード交易路を押さえ、300年にわたり青海の一大遊牧国家として繁栄した[i]。のち、吐谷渾は西域支配をめざす隋煬帝および唐太宗の攻撃を受け、さらにソンツェン＝ガンポのもと吐蕃（チベット）が勃興するとその攻撃を受けて、王国は663年に滅亡した。吐谷渾の人々は四散し、王族の慕容諾曷鉢率いる一派は唐に亡命を余儀なくされた。そのほか吐蕃の支配を逃れて唐に帰順する集団もあった。軍閥が割拠した唐末五代期になると、彼らは台頭した各勢力に分散吸収され、北宋期では禁軍のなかに吐谷渾の名が確認される[ii]。一方、河西以西・チベットに残留した吐谷渾については、

※　陝西師範大学外国語学院講師

i　東西交渉史上の吐谷渾の重要性を指摘した代表的な研究として、松田壽男「吐谷渾遣使考（上・下）」（『史学雑誌』第48編11・12号、1937年、のち日比野丈夫他編『松田壽男著作集』第4巻、六興出版、1987年、68～126頁に収録）等がある。

ii　たとえば、河北省定州博物館所蔵の北宋代の石函銘文から定州に配置された禁軍の吐谷渾部隊の存在が確認でき、「吐渾第三指揮使」等の役職や「吐渾使白謙」等の人名が見られる。森部豊「北中国における吐谷渾とソグド系突厥――河北省定州市博物館所蔵の宋代石函の紹介と考察」（同著『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』関西大学出版会、2010年所収）参照。また銘文全文は、村井恭子「唐末

たとえば吐蕃支配時期に、ツェンポとの婚姻関係をもった吐谷渾王が立てられて吐蕃の統治下で吐谷渾民衆を率いていたことや、9～10世紀の敦煌の帰義軍節度使領域に吐谷渾がいたことが敦煌文書等からうかがえる[iii]。

このように、吐谷渾の活動は王国滅亡後も含めて少なくとも4～11世紀の長期にわたり、とくに青海に遊牧国家として存続した時期には中央アジア・チベット・モンゴリア・中国の各勢力と関わった。国際関係・政治・経済・軍事・宗教（とくに仏教）等幅広い研究視座を我々に与える点で注目される。

こうした吐谷渾の動向を伝える史料としては、編纂物・石刻・文書・木簡・壁画等の形態があり、言語も古漢語のほか古チベット語や古テュルク語等複数言語によって記録されている。このうち吐谷渾の漢語石刻墓誌については、清朝末・民国時代より中国甘粛省武威市において唐に亡命した王族慕容氏一族の陵墓と墓誌が発見されていたが、2000年代に入りさらに新たな墓誌が複数発見されている。最新のものでは2019年9月に、甘粛省武威市天祝県祁連鎮から喜王慕容智の陵墓が未盗掘の完全な状態で発見され、多くの副葬品とともに「大周故慕容府君墓誌」と篆書で刻字された墓誌蓋と墓誌石本体が得られた。墓誌本文は漢文で書かれ、さらに墓誌石側面に未知の文字（あるいは変形漢字）らしきものが刻まれており話題を呼んでいる。墓誌全文は現在未公開だが、墓主の慕容智は慕容諾曷鉢の第3子であり、その身分を「大周雲麾将軍守左玉鈐衛大将軍員外置喜王」と記し、武則天の天授二年（691）に42歳で病死したという。今回の発見によって唐代吐谷渾研究のさらなる進展が期待されている[iv]。

五代オルドス・河東の党項・吐谷渾関係石刻史料――研究状況の紹介と考察」（同編『文物考古資料による唐～宋代オルドス地域の歴史的構造の研究』〔平成27～29年度科研費成果報告書〕、2018年）の文末附録2を参照のこと。

iii　馮培紅「従敦煌文献看帰義軍時代的吐谷渾人」（『蘭州大学学報』2004年第1期、22～30頁）、楊銘「論吐蕃治下的吐谷渾」（『青海民族研究』第21巻第2期、2010年、106～109頁）、旗手瞳「吐蕃による吐谷渾支配とガル氏」（『史学雑誌』第123編第1号、2014年、38～63頁）等の専論がある。

iv　甘粛日報サイト、「【走近考古】神秘的唐代吐谷渾王族墓葬式」（執筆者：武威市博物館・黎大祥、http://xgs.gansudaily.com.cn/pages/h5/culture/745eaeccd850403aa86dce87335b8278.html?from=timeline、2020年10月12日閲覧）のほか、中国語インターネットニュース（https://kknews.cc/n/9596rob.html、2020年10月12日閲覧）を参照。

本論文[v]は、この慕容智墓発見と同時期に発表されたためその墓誌については触れていないが、これ以前の華北地域で発見された北朝～唐代の吐谷渾墓誌20点について、その出土状況や関連の研究を紹介しつつ著者による考察を加えたものである。著者の周偉洲氏（1940年生、現在陝西師範大学中国西部辺疆研究院教授・前院長）は、中国を代表する西北少数民族史の研究者であり、吐谷渾研究では早期に専著を発表している[vi]。近年も最新情報を加えた資料集[vii]を刊行するなど、新出史料によって情報を更新しつつ研究を発表し続けている。つまり、本論文は当該分野の第一人者が吐谷渾墓誌の情報整理と考察を行ったものであり、吐谷渾墓誌について全般的な知見が得られるほか、今後発表されるであろう慕容智陵墓および墓誌内容の情報をより深く理解するうえでも非常に有用である。

なお、翻訳に際して読者の便宜をはかり訳者が脚注に補注（1）～（12）、文末に〔附録1～5〕をつけて関連情報を追加した[viii]。また、第三章で考察される「慕容曦輪墓誌」については、平田陽一郎氏がすでに詳細な訳注を発表しているので[ix]、本稿では簡略に扱うこととした。

また、発掘調査の状況については中国中央電視台（CCTV-10）で「2020考古進行時第一季甘粛祁連大墓発掘記」（一）、（二）というドキュメンタリー番組が放映された（インターネットで視聴可能。（一）http://tv.cctv.com/2020/02/27/VIDER03QxmVy5HaaeZqIPScp200227.shtml および（二）http://tv.cctv.com/2020/ 02/28/VIDEuGhP0KSfveUEdNKmcgDG200228.shtml?spm=C53121759377.PCO7tSikSFa8.Ezufm7A0dzE0.63、2020年10月12日閲覧）。陵墓内部の様子や、副葬品・木棺・墓誌石・壁画等が確認できる。現時点では甘粛省考古学研究所による6月14日の会議報告「吐谷渾王族墓葬群考古工作専家諮会紀要」が新しい（https://mp.weixin.qq.com/s/EDmEwpidpKnTNtaI6xclTQ、2020年10月12日閲覧）。

v　『中国辺疆史地研究』第29巻第3期、2019年9月、65～79頁に掲載。

vi　周偉洲著『吐谷渾史』、寧夏人民出版社、1985年。

vii　周偉洲編著『吐谷渾資料輯録』（増訂本）、商務印書館、2017年。

viii　周氏原文における誤字脱字については、論旨に影響しない場合は改訂部分を明記しない。

ix　平田陽一郎「『唐・慕容曦輪墓誌』の訳注と考察」（『沼津工業高等専門学校研究報告』第54号、2020年、87～94頁、のち同著『隋唐帝国形成期における軍事と外交』汲古書院、2021年、第Ⅳ部第四章に収録）。以下「平田訳注」と略称する。

周偉洲「吐谷渾墓誌通考」

20世紀より以来、今の河南省洛陽市・陝西省西安市・甘粛省武威市・河北省磁県・寧夏回族自治区同心県等の地で、前後して吐谷渾人の墓誌が出土し、約20点になる。学者達は相次いで論文を書いて研究し、多くの新発見があった。これらの墓誌は、歴史文献に記された西北民族吐谷渾の歴史を補うだけでなく、中国中古時期における西北地域の民族関係および歴史についても、多くを補い裨益するところが大きい。本文はこれらの吐谷渾墓誌の研究史を整理したうえで、墓誌に関して判断が付かず論争になっているいくつかの問題についてさらに考察を加え、最後に墓誌について総合的な論評を行いたいと思う。

一　吐谷渾墓誌の出土および研究の概況

聞くところによると民国初年に、甘粛省武威市の南山で初めて2点の吐谷渾墓誌が発見された。すなわち「大周故西平公主（もと弘化公主）墓誌」（以下「弘化公主墓誌」と略称）および「大唐故代楽王上柱国慕容明墓誌」（以下「慕容明墓誌」と略称）である。1927年の武威大地震で、また「大周故青海国王烏地也拔勤豆可汗（慕容忠）墓誌」（以下「慕容忠墓誌」と略称）と「大唐故輔国王慕容宣徹墓誌」（すなわち「慕容神威遷奉墓誌」）が出土した。続いて杜光簡「烏地也拔勤豆可汗墓誌考釈」（『責善半月刊』1941年第13期）、甘粛の学者慕寿祺「唐弘化公主墓誌銘跋」（『責善半月刊』1941年第14期）が、弘化公主およびその子慕容忠の墓誌について考証を行った。以上の4点の墓誌は、また張維編『隴右金石録』（1943年活字本）の中に収録されている。現在これらはすべて武威文廟にある[(1)]。

(1)　訳者自身は未確認だが、浙江大学馮培紅教授から得た情報では、2019年5月に武威市博物館新館が新設され、元来武威文廟の建物内部の壁面に展示されていたこれら吐谷渾関係の墓誌は、すべてこの新館に移管されたという。

1944年、夏鼐氏は甘粛省武威市南山の喇嘛湾で考古発掘を行い、また「大唐金城県主（慕容忠に嫁ぐ）墓誌」と「慕容曦光墓誌」の2点の墓誌を得て、1948年に「武威唐代吐谷渾慕容氏墓誌」という論文で発表し、これは『中央研究院歴史語言研究所集刊』第20本上冊に掲載された[1(2)]。この論文は新たに得られた2点の墓誌について詳細かつ深く論述し、さらに上述の4点の墓誌及び文献と組み合わせて、貞観十四年（640）から貞元十四年（798）までの唐領内に入った後の吐谷渾歴史「年表」を詳細に書き上げている。

1956年、趙万里氏はその編著『漢魏南北朝墓誌集釈』（科学出版社、1956年）を出版し、河南省洛陽市出土の「魏故直寝奉車都尉汶山侯吐谷渾璣墓誌」（図版二二〇）と「魏故武昌王（元鑑）妃吐谷渾氏墓誌」（図版七一）という2点の北魏時代の吐谷渾貴族の墓誌を著録し、あわせて初歩的な考察を行った。

1958年、甘粛省武威市南山の喇嘛湾でまた「大唐隴西郡夫人李氏（名は深、吐谷渾元王慕容若に嫁ぐ）墓誌」が出土した[2]。1981年に武威南山の喇嘛湾に隣接する青嘴湾でまた「大唐故武氏（慕容曦光に嫁ぐ）墓誌」が出土し、同地の寧篤学が「甘粛武威南営発現大唐武氏墓誌」という論文を書き、『考古与文物』1981年第2期に発表した。この年7月、筆者は折良く中国唐史学会主催のシルクロード調査に参加し、甘粛省武威市南山青嘴湾・喇嘛湾の吐谷渾の先塋を調査し、あわせて武威文廟に保管されている「大唐故武氏墓誌」を見ることができた。調査終了後、筆者は「武威青嘴喇嘛湾出土大唐武氏墓誌補考」という論

1　1961年、夏鼐著『考古学論文集』（科学出版社）出版時に、内容がいくらか修正され、併せて「補記」が加えられた。1981年『中国考古学研究』（日本語版）出版時に、また「再補記」が加えられた。この論文の完全版は中国社会科学院考古研究所編輯『夏鼐文集』中冊（社会科学文献出版社、2000年、119～148頁）を参照されたい。

⑵　日本語版は、夏鼐著（樋口隆康他 訳）『中国考古学研究』（学生社、1981年）の第2章に「武威唐代吐谷渾慕容氏墓誌」（礪波護 訳）を収録。また武威南山喇嘛湾および青嘴等の吐谷渾陵墓と墓誌の状況については、秋山進午「甘粛武威考古劄記――平成9年度国際学術研究報告の2」（『大手前女子大学論集』第32号、1998年）の第7章「青嘴・喇嘛湾吐谷渾墓地」にも中国の発掘報告の詳細なまとめがある。

2　前掲『夏鼐文集』「再補記」の中に収録されている。また周偉洲編著『吐谷渾史料輯録』（増訂本）、（商務印書館、2017年）にも録文がある。墓誌の中の婦人の名の下の一字は不鮮明なので、夏鼐氏の録文が「深」につくるのによった。

文を書き、調査隊編『絲路訪古』文集（甘粛人民出版社、1982年）に掲載した。文中では墓主武氏（武則天の甥の孫娘）が嫁いだ吐谷渾燕王「慕容公」と、墓誌に記されるその子慕容兆について考証した。両『唐書』の吐谷渾伝には「宣趙（『新唐書』は「宣超」）卒し、子曦皓嗣ぐ。曦皓卒し、子兆嗣ぐ。」（『旧唐書』）という記載があり、筆者はこの慕容公はすなわち曦皓であろうと提起した。夏鼐氏は上述の論文で「あるいは曦光は曦皓かもしれないが、しかし「曦光墓誌」は「青海国王」を襲封したことを書き漏らすはずはないので、これは2人の人物であろう」述べ、2人は兄弟だとしている。筆者は曦光と曦皓はおそらく同一人物だと考え、上述の両『唐書』の文を引用し、詳細に考証した。

1983年、寧夏回族自治区の考古学者鐘侃が同自治区同心県韋州出土の「大唐故領軍衛大将軍慕容威（慕容神威）墓誌」を公表し、論文を書いて考察した。「唐代慕容威墓誌浅釈」という題名で、『考古与文物』1983年第2期に掲載された。1984年の『文物』第4期に「河北磁県東陳村北斉堯峻墓」の発掘簡報が掲載され、出土した3点の墓誌の中には、「故驃騎大将軍開府儀同三司征羌県開国侯堯公妻吐谷渾（静媚）墓誌」（以下「吐谷渾静媚墓誌」と略称）があった。翌年、筆者は「河北磁県出土的有関柔然・吐谷渾等族文物考釈」（『文物』1985年第5期）という一文を著した。文中では上述した趙万里氏の著書の中の2点の墓誌および「吐谷渾静媚墓誌」を組み合わせ、北魏に帰順した吐谷渾王族の傍系一族について整理と考証を行った。

1985年、筆者は『吐谷渾史』を著し、寧夏人民出版社から出版した。この本の中では吐谷渾の歴史と関連させて、上述の出土墓誌（「吐谷渾静媚墓誌」以外）について論じた[3]。1992年に筆者が出版した『吐谷渾資料輯録』（青海人民出版社）の中では、以上の出土した吐谷渾墓誌計13点を著録し、いくらか考察を加えた。

1994年、甘粛省楡中県の孫永楽と李維貴が論文を書き、1973年に楡中の朱家湾で調査されたある唐墓から、「交河郡夫人慕容氏墓誌銘」という墓誌残欠

3　周偉洲著『吐谷渾史』（寧夏人民出版社、1985年）、43～44頁、158～162頁を参照。

が出土したことを公表し、『中国辺疆史地研究』1994年第2期と1995年第1期に前後して発表した(3)。のちに筆者は「甘粛楡中出土唐交河郡夫人慕容氏墓誌釈証」（周偉洲主編『西北民族論叢』第1輯、中国社会科学出版社、2002年）という一文を書き、つぎのような見方を示した。残欠墓誌に記される慕容氏（名は「儀」）の祖先は「……可汗、青海國……超」であり、2本の論文がこの墓誌の「慕容氏」を十六国南燕慕容徳の兄納の子慕容超と解釈するのは誤りで、これは吐谷渾青海国王慕容宣超である。交河郡夫人も「交河郡王（高昌王麴崇裕）」の夫人ではないこと、あわせて墓誌の記す夫人の葬地「薄寒山」は、今の甘粛省蘭州市東南の興隆山一帯であることも考証した。

1995年に三秦出版社から呉剛主編『全唐文補遺』第2輯が出版され、1990年代に今の西安市長安区杜城一帯から出土した「唐故大同軍使雲麾将軍左武衛大将軍寧朔県開国伯慕容公（曦皓）墓誌」（以下「慕容曦皓墓誌」と略称）が公表された[4]。続いて靳翠萍「唐与吐谷渾和親関係始末考」（『敦煌学輯刊』1998年第1期）、杜林淵「従出土墓誌談唐与吐谷渾的和親関係」（『考古』2002年第8期）、孫瑜「唐慕容曦皓墓誌考釈」（『山西師範大学学報』2010年第3期）、李鴻賓「慕容曦光夫婦墓誌銘反映的若干問題」（『唐史論叢』第14輯、陝西師範大学出版社、2012年）等の論文が発表された。上述の諸論文はいずれも曦皓墓誌の出土によって、両『唐書』吐谷渾伝の記載に誤りがあると考え、筆者が曦光と曦皓が同一人物であると考証した誤りを正し、あわせて吐谷渾王族と唐朝との和親についてさらに一歩進んだ研究を行った。

1998年、上述の呉剛主編『全唐文補遺』第5輯（三秦出版社、1998年）が陝北の吐谷渾人に関する墓誌を著録した。かつて「行延州刺史」に任じられた「隴西李府君（李良僅）墓誌」である。前後して姫乃軍・范建国「唐李良僅墓誌銘

(3)　正確には、孫永楽「交河郡夫人墓·高昌·吐魯番——兼述高昌与中原的関係」（『中国辺疆史地研究』1994年第2期）および李維貴「交河郡夫人慕容氏墓誌序碑文——兼与孫永楽先生商榷」（『中国辺疆史地研究』1995年第1期）。

4　周紹良・趙超主編『唐代墓誌滙編続集』（上海古籍出版社、2001年、697頁）にもこの墓誌が収録されている。

考釈」（『考古与文物』1996年第1期）、陳根遠「李良僅墓誌考釈質疑」（『文博』1999年第3期）、韓香「唐代吐谷渾的遷徙及其在陝北地区的活動――延安市出土《李良僅墓誌》研究」（『中国辺疆史地研究』2011年第1期）が出た。

21世紀にはまた吐谷渾貴族の墓誌がまとまって出土した。2014年に呉敏霞主編『長安碑刻』（陝西人民出版社、2014年）が、今の西安市長安区郭杜（唐代の高陽原）で出土した「故朔方副元帥防秋兵馬使金紫光禄大夫張掖郡王慕容瑰墓誌」を著録した(4)。同年、陳瑋が「新出唐吐谷渾王族慕容環墓誌研究」（『中国辺疆史地研究』2014年第4期）を発表し、唐の安史の乱前後における吐谷渾の歴史と関連させて、この墓誌について詳細な考証を行った。2013年、濮仲遠「唐代吐谷渾慕容氏王室墓誌研究述評」（『青海民族大学学報』2013年第3期）は、出土した唐代吐谷渾慕容氏の11点の墓誌の研究概況を論評し、墓誌研究から、吐谷渾の家系と唐の和親および入侍宿衛等に関する研究概況を述べた。

2014年から2015年にかけて陝西省考古研究院等の考古学者が、西安市長安区大兆郷郭新村にある1基の北朝墓葬を発掘し、2点の墓誌が出土した。1点は「茹茹驃騎大将軍俟利莫何度支尚書金城王乞伏孝達妻暉華公主吐谷渾氏墓誌」（「吐谷渾暉華公主墓誌」と略称）であり、もう1点は公主の夫である「乞伏孝達墓誌」である。「乞伏孝達墓誌」は朱砂で書かれているうえに字が脱落しているため、もう判読は難しい。陝西省考古研究院がこの墓葬に関する発掘簡報あるいは報告をまだ発表していないので、これについて発表出版された論著はまだない5(5)。

---

(4)　これ以前に、西安市長安博物館編『長安新出墓誌』（文物出版社、2011年、238～239頁）に公表されている。墓誌全文は後掲〔附録1〕を参照のこと。

5　巷間およびインターネットから漏れ聞こえる所によれば、出土した「吐谷渾暉華公主墓誌」は文字は多くないものの、北朝期吐谷渾の政治制度の変革、吐谷渾と漠北の柔然（茹茹）との和親関係、吐谷渾と西魏の関係等について、いずれも重要で新たに史料の欠を補う内容と学術的価値を持っているという。

(5)　これについては、陝西省考古研究院・陝西歴史博物館・長安区旅游民族宗教文物局「陝西西安西魏吐谷渾公主与茹茹大将軍合葬墓発掘簡報」（『考古与文物』2019年第4期、36～60頁）が発表された。また、本墓誌は陝西省考古研究院編『陝西省考古研究院新入蔵墓誌』（上海古籍出版社、2019年、拓本4頁、録文229頁）にも掲載されている。墓誌全文は後掲〔附録2〕を参照のこと。

2018年、前後してまた2点の重要な吐谷渾の墓誌が世に出た。1点は李浩「新見唐代吐谷渾公主墓誌的初歩整理研究」（『中華文史論叢』2018年第3期）が著録し、詳細に考証を加えた「大唐興聖寺尼成月公主□氏墓誌」である。もうひとつは西安市長安区郭杜で出土した「唐故中郎将開国伯慕容府君（慕容曦輪）墓誌」（以下「慕容曦輪墓誌」と略称）である。これは王国玉・王河松「唐《慕容曦輪墓誌》考弁」（『書法叢刊』2018年第4期）が刊行公開し、あわせて考証を行っている。

以上が現在までのところ筆者が関知している吐谷渾墓誌の出土および研究概況であり、墓誌は合計20点ある。最近数年に出土あるいは著録された「吐谷渾暉華公主墓誌」、「大唐興聖寺尼成月公主□氏墓誌」および「慕容曦輪墓誌」の3点を除く17点は、いずれも2017年に商務印書館から出版された筆者編著の『吐谷渾資料輯録』（増訂本）の中で著録し簡単な注釈もある。そのほか国内で出版された石刻・碑銘・墓誌匯編、たとえば『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』、『隋唐五代墓誌匯編』、『全唐文補遺』、『唐代墓誌匯編』、『全唐文新編』等にも、上述の吐谷渾墓誌の多くが著録されている。

二　21世紀新出吐谷渾墓誌についての補考ー

上述のように21世紀に新たに出土した吐谷渾墓誌は合計4点ある。そのうち「吐谷渾暉華公主墓誌」は考古発掘簡報がまだ正式に発表されていないが、そのほかの3点の墓誌は吐谷渾史の多くの方面において、いずれもすでに学者が考察と研究を進めており、多くの新発見がある。しかし増補し訂正する必要もある。これより以下のいくつかの方面について論述する。

1. 吐谷渾の家系および封爵問題について

まず李浩「新見唐代吐谷渾公主墓誌的初歩整理研究」では、「『弘化公主墓誌』は『嗣第五子右鷹揚衛大將軍宣王萬等』と記し、『成月公主墓誌』は公主を慕

容鉢（すなわち諾曷鉢）の第2女と記すので、諾曷鉢の跡継ぎは少なくとも五男二女いたはずだが、目下のところ史書および学者の研究では彼には3人の子がいたとしか言及していないので、新文献の出土と研究には歴史を補う働きがある。」と述べる。この説は正しいが、「成月公主」の封号は唐朝に封じられたものではなく、前述の諸墓誌が記す「政楽王」「輔国王」「代楽王」の封号と同様に、吐谷渾本蕃が自ら封じたものである。

西安市長安区郭杜で出土した「故朔方副元帥防秋兵馬使金紫光緑大夫張掖郡王慕容瑰墓誌」（以下「慕容瓌墓誌」と略称）について、陳瑋論文が「慕容環」とするのは誤りで、「慕容瓌」とするべきである[6]。この墓誌はその祖先について遡って「高祖志烈、字諾鉢（諾曷鉢）、唐は尚書唐儉を使わし可汗・青海國王・駙馬都尉に冊せしむ。妣は西平大長公主なり。曾祖忠、字大海は、可汗・青海國王を嗣ぎ、工部尚書となる。妣は金城縣主なり。祖宣超、字上仙、唐は衛尉卿唐休璟を使わし節を持して冊し可汗・青海國王を嗣がしむ。妣は姑臧縣主なり。父相、字千尋、改めて字に就く。」と述べる。このうち宣超は慕容瓌の祖父・慕容相の父であるから、宣超には曦光・曦皓の2人の子の他に慕容相というもう1人の子がいたのである。新たに出土した「慕容曦輪墓誌」はまた「父宣超は、驃騎大将軍兼范陽郡大都督を贈せらる。」と記す。このように宣超には少なくとも4人の子がおり、4人の子の墓誌によれば、4人の兄弟関係もおおよそ考察できる。

慕容曦光、唐開元二六年（738）卒す、年49、すなわち唐調露二年（680）出生。

慕容曦輪、唐天宝八年（749）卒す、年43、すなわち唐中宗景龍元年（707）出生。

慕容曦皓、唐宝応元年（762）卒す、年55、すなわち景龍二年（708）出生。

慕容相、「慕容瓌墓誌」にわずかに「廣徳年（763～764）疾に遇い、原州（州治は今の寧夏回族自治区固原市）に終わる。」と記すのみである。

以上のように推算すると、曦光が長兄であり、曦輪は次兄である。もし相が

6　呉敏霞主編『長安碑刻』は「慕容瑰」に作り、「瑰」は「瓌」の略字なので、人名では「瓌」とするのが正しい。

卒したときに57歳以後であれば、相が年長で曦皓は第4子である。もし相が卒したのが55歳より前なら、曦皓が年長で相が第4子である。曦輪と曦皓の年齢差はわずか1歳で、しかも「慕容曦皓墓誌」は「姑臧縣主（宣超妻）の次子」と記しており、つまり曦輪は姑臧県主の産んだ子ではなく、庶出である[7]。

注目すべきは、以上2点の墓誌が記す先祖の名・字（あざな）および官爵の名号である。「慕容瓌墓誌」は「高祖志烈、字諾鉢、唐は尚書唐儉を使わし可汗・青海國王に冊し駙馬都尉とす。」「曽祖忠、字大海は、可汗・青海國王を嗣ぎ、工部尚書となる。」「祖宣超、字上仙、唐は衛尉卿唐休璟を使わし節を持して冊し可汗・青海國王を嗣がしむ。」と記す。「慕容曦輪墓誌」は「父宣超は、驃騎大将軍兼范陽郡大都督を贈せらる。」などと記す。その中で「志烈」「大海」「上仙」等の漢式の姓名あるいは字は、いずれも史籍あるいは他の墓誌には見られないものである。その先祖はすでに早くからこの漢名と字を持っていたのだろうか。あるいは「慕容瓌墓誌」を書くときに付け加えたのだろうか。今となっては確定しがたい。いずれにしても、これは吐谷渾王族が内地に移住後、次第に漢化していった事実を説明している。

「唐は尚書唐儉を使わし可汗・青海國王に冊し駙馬都尉とし」た諾曷鉢について、先述の陳瑋論文は考証を行い、唐が諾曷鉢を可汗・青海国王に封じたのは、貞観十五年（641）に唐倹・馬周が使持節として吐谷渾の撫慰に赴いたときだとする。また「西平大長公主（弘化公主）墓誌」の「貞觀十七年、出でて青海國王・勤豆可汗慕容諾賀鉢に降す」という記載を引用して根拠とし、これにより『新唐書』吐谷渾伝の「乾封初（666）、青海國王に更封す」という記載は「時間のうえで誤りである」とする。しかしこの説は不正確である。墓誌の諾曷鉢の封号についての叙述が漠然としているからである。もしも陳瑋の言うとおりであれば、以上の封号は「疑いなく唐朝廷が諾曷鉢の官爵を封じた時間の順序に従って記載している」ことになる。しかし「西平大長公主（弘化公主）

7　王国玉・王河松「唐《慕容曦輪墓誌》考弁」の推測は成立し得る。

墓誌」は武周聖暦二年（699）に書かれており、このとき諾曷鉢はすでに青海国王にあらためて封じられているので、墓誌にはこう記載しているのである。また『冊府元亀』巻964、外臣部、封冊2（宋本なし）はこのことをさらに詳細正確に「乾封元年五月、河源（郡）王慕容諾曷鉢を封じて青海王と爲す。」と記す。つまり唐朝ははじめは諾曷鉢を「河源（郡）王」に封じ、乾封になってやっとあらためて青海国王に封じたのである。したがって上に引用した『新唐書』吐谷渾伝および『冊府元亀』巻964の記載は信用することができる[(6)]。

「慕容瓌墓誌」はその曾祖父忠の官職を記し、その中に「工部尚書」という職があり、史籍および「慕容忠墓誌」の記載には見られないが、これが死後の追贈なのか、書き漏らしなのかは不明である。また墓誌は「祖宣超、字上仙、唐は衛尉卿唐休璟を使わし節を持して冊し可汗・青海國王を嗣がしむ。」と記す。史書は宣超が父忠の官爵を襲封したと記すが、「青海国王」に封じたことは見えないので、これは史書の欠を補うことができる。「慕容曦輪墓誌」が「父宣超は、驃騎大将軍兼范陽郡大都督を贈せらる。」と記す官爵は、明らかに死後の追贈である。

2. 出土した吐谷渾の２人の公主の墓誌、すなわち上述の西魏時期の「吐谷渾暉華公主墓誌」および唐弘化公主の娘「大唐興聖寺尼成月公主□氏墓誌」（以下「吐谷渾成月公主墓誌」と略称）について

前者は考古発掘簡報がまだ発表されていないので、ここではしばらく論じないが、後者はすでに先述の李浩論文が発表されている。李浩論文は弘化公主の娘成月公主の身の上および唐朝との関係や、成月公主が出家して尼となったこ

(6) 周氏原文では『冊府元亀』巻964の引用を「乾封元年五月、封河源郡王諾曷鉢爲青海王」と記すが、原典では「河源王」と記すため、本稿では「河源（郡）王」と表記した。ちなみに、慕容諾曷鉢が河源郡王に封じられたのは太宗貞観十年である（『通典』巻190、辺防6、吐谷渾および『唐大詔令集』巻129「宥吐谷渾制」。なお『旧唐書』太宗紀は貞観九年十二月とする）。後文にも関連して、青海王と青海国王の違いについても論ずるべき点があるかもしれないが、本稿では触れない。

とから、唐の興聖寺および貴族の婦女の崇仏現象等を考察するなど、多くの新発見がある。しかしさらに一歩進んで討論する価値のある問題をいくつか提起したい。

まずこの墓誌の釈読についての問題である。李浩論文は墓誌の文を「成月公主諱□□、吐溶（裕）渾可汗海國王慕容鉢の第二女なり。」と釈文する。このうちの「吐溶（裕）渾」はすなわち吐谷渾であり、この箇所の「谷」は『金壺字考』の言うように、読みは浴あるいは鹿とするべきである。北朝造像碑の供養人題名の中にも「吐浴渾」という姓氏がある[8]。「溶」と「浴」あるいは「裕」は音が近く、故に墓誌は「吐溶渾」と書いているのである。また墓誌の中の「海國王」は、明らかに「青」の一字が脱けている。李浩論文は『新唐書』吐谷渾伝を引用して「乾封元年（666）に、高宗は諾曷鉢を封じて青海郡王とし、つまり墓誌の言う所の『海國王』である。」と言う。この説は不正確である。思うに、上に引用された『新唐書』の文を見ると、高宗が諾曷鉢を封じたのは「青海郡王」ではなく、「青海国王」である。唐の官制では、王爵は正一品であり、郡王爵は従一品である[9]。故に墓誌の「海國王」は「青海国王」あるいは「青海王」であるはずで、「青海郡王」ではない。これと関連して、李浩論文は以下の文を「祖及父并嫡嫡相承、海國王并、褥情爽秀、風局清敞」と釈文するが、これは「祖及父并嫡嫡相承（青）海國王、并褥情爽秀、風局清敞」と切るべきではないだろうか（図1）[(7)]。

つぎに、李浩論文は弘化公主が吐谷渾諾曷鉢に嫁いだ時期について論じ、過去の学者の意見が分かれる観点を引用し、「伝世文献が記す弘化公主が吐谷渾諾曷鉢に嫁いだ時期（貞観十四年）と出土した「弘化公主墓誌」（貞観十七年）とは異なる。学界では伝世文献を採用する見方が多いが、筆者は、もしもより

8　周偉洲「甘粛正寧出土北周造像題銘考釈」（王宗維・周偉洲編『馬長寿紀念文集』、西北大学出版社、1993年）を参照されたい。

9　『通典』巻40、職官22、大唐官品。

(7)　周氏原文では「吐谷渾成月公主墓誌」の拓本を掲載するが本稿では掲載しない。全文は後掲〔附録3〕を参照のこと。

直接的で有力な文献の根拠がないのなら、墓誌を正しいとするべきで、少なくとも意見の違いがあることを説明し、両論を併記すべきであると考える。」と結論する。筆者が思うに、弘化公主が諾曷鉢に降嫁した時期について、文献記載はいずれも貞観十四年という。『旧唐書』吐谷渾伝のほか、『旧唐書』太宗紀下、『新唐書』宗室道玄伝、『資治通鑑』巻196、貞観十四年四月丁巳条などである[10]。最も有力な根拠は、宋代の王欽若編の類書『冊府元亀』である。この書の唐代部分は唐代諸帝の『実録』を多く引用しているので、信頼度が非常に高い。この書の巻978、外臣部、和親1には、「（貞観）十四年、吐谷渾烏地也拔勤豆可汗諾曷鉢入朝して婚を請う……ここに至り、遂に弘化公主を以て諾曷鉢に妻（め）あわせ、資を送ること甚だ厚し。」と明確に記している。

さらに重要なのは、『冊府元亀』巻358、将帥部、立功11に「貞觀十五年、（席君買）精騎百二十を率いて吐谷渾の丞相宣王を襲撃し、これを破り、その兄弟三人を斬る。〔小注：はじめ丞相宣王はその國權を專らにし、陰かに難を作さんと謀り、詐りて山神を祭ると言い、すなわち人杖を結び、まさに弘化公主を襲い、その王誥（諾）曷鉢等に劫（せま）りて吐蕃に奔らしめんとし、期（ちぎ）るに日あり。誥（諾）曷鉢知りて大いに惧れ、輕騎を率いて鄯城（今の青海省西寧）に走り、部する所の咸（威）信王兵を以てこれを迎え……。〕」（李浩論文の後掲附表の中でもこの事件について記す）と記していることである。もしも貞観十四年に弘化公主が吐谷渾の諾曷鉢にまだ降嫁しておらず、「弘化公主墓誌」の記すように、貞観十七年になってから降嫁したのだとすれば、上述の貞観十五年に宣王が乱を起こしたとき、弘化公主と諾曷鉢が逃れて鄯城に至ったという記載はあり得ない。したがって「弘化公主墓誌」が貞観十七年に諾曷鉢に降嫁したと記載するのは、誤りである。

また李浩論文は「唐代には弘化公主が諾曷鉢に降嫁したほか、金城県主が慕

10　『新唐書』巻78、淮陽壮王道玄伝に「（弟の道明は）貞觀十四年、武衛將軍慕容寶節と弘化公主を吐谷渾に送り、主は帝の女にあらざるを漏言するに坐して、王を奪い、鄆州刺史に終わる。」とある。

容忠に降嫁し、金明県主が闥盧模末に降嫁しており、後の２人の公主の婚約と嫁入りについて、弘化公主はその間にあって重要な役割を果たした。」という。上述の唐宗室の女性と吐谷渾王族との通婚以外に、また姑臧県主が慕容宣超に降嫁している。しかし以上の県主について、李浩論文は唐宗室の女性を弘化公主に封じて降嫁したのと同様であるというがそのようなものではなく、彼女たちは公主に封じられたものの、ただの「県主」でしかなかった。唐の官制によれば、「武太后天授二年、また皇孫官員を置く。皇姑を大長公主と爲し（たとえば弘化公主はのちに大長公主に封ぜられた）、姉妹を長公主と爲し、女を公主と爲し、皆國に封じ、正一品に視（なぞら）う。太子の女を郡主と爲し、郡に封じ、従一品に視う。親王の女を縣主と爲し、縣に封じ、正二品に視う。[11]」とある。以上吐谷渾と和親した「県主」は、諸宗室親王の娘に当たり、県主に封ぜられ、県主の前の地名は封じられた県名である。

吐谷渾の諾曷鉢から始まるその王族と唐との和親は、公主から、諾曷鉢のつぎの第二世代（慕容忠・闥盧模末）および第三世代（慕容宣超）までは親王の娘「県主」を娶り[12]、第四世代でも外戚の娘武氏（慕容神威・慕容曦光）を娶ったが、第五世代になると高位の門閥大姓の娘（元王慕容若は隴右成紀李氏を娶り、慕容瓌は河南穆氏を娶る）等を娶った。その唐との和親の格式は世代を経るごとにすべて下降しているのがわかる。これは別の面から見れば、吐谷渾政権滅亡後、内地に移住した吐谷渾王族の地位が次第に下降し、漢族貴族官僚と同等の地位に至ったことを反映しており、これはその漢化の過程の反映でもある。

李浩論文はまた「大唐故興聖寺主法澄塔銘并序」を引用し、吐谷渾成月公主がなぜ幼年で出家し尼になったのかという問題について論じている。結論としては、当時弘化公主および諾曷鉢と唐朝の関係は良好で、成月公主が法澄のように家族が罪を犯したため出家したということはあり得ず、「故に成月公主が

11　『通典』巻31、職官13、歴代王侯封爵［公主并官属附］。
12　宣超の弟宣徹は博陵崔氏の娘を娶り、博陵郡太夫人に封ぜられた（「慕容威墓誌」参照）。

寺に入ったのは堅い信仰心によるものでなければ、一種の懲罰であった。今のところさらに多くの史料がないので、これ以上詳細に推測はできない。」とする。筆者は僭越ながら、成月公主が幼年で出家し尼となったことについてひとつの推測をしたいと思う。吐谷渾王族は早くも慕利延在位（436～452年）のときから、仏教への接触と信仰を始めていた[13]。公主は貞観二十年（646）に生まれ、総章元年（668）に亡くなっており、このとき唐朝では霊州に属する安楽州と京師長安とを問わず仏教はどこでも十分盛んであり、寺院が林立していた。これは成月公主の出家に対する仏教的雰囲気という大きな環境の影響である。またおそらく公主は幼少より体が弱く病気がちだったので、その父母は健康を祈るため彼女を寺に送って尼としたのかもしれない。これは公主が23歳で夭折したことから推し量れるだけである。もちろんこれもまた一種の推測に過ぎない。

最後に、「成月公主墓誌」では公主は「明堂縣少陵原」に葬られたと記すが、『元和郡県図志』巻1、関内道、京兆府万年県条によると「武德元年、復して萬年と爲す。乾封元年（666）、分けて明堂縣を置き、永楽坊を理とし、長安三年（703）廢す。天寶七年、改めて咸寧と爲し、乾元元年（758）復して萬年縣と爲す。」とある。公主は総章元年（668）に卒したので、墓誌には「明堂縣少陵原」と記すが、じつは京兆府万年県の少陵原である。この地は今の西安市長安区韋曲大兆一帯である。

三　21世紀新出吐谷渾墓誌についての補考二

王国玉・王河松「唐《慕容曦輪墓誌》考弁」（以下「王国玉論文」と略称）は、最も新しく公表されたこの墓誌についての考察であり、未解決の難問および討論すべき問題が多く含まれる。ゆえに墓誌全文を引用して再検討する。墓誌文

13　周偉洲著『吐谷渾史』、130～131頁を参照。

の拓本（図2）[8] および王国玉論文の録文を参照し、全文を以下に再録する。

唐故中郎将・開國伯慕容府君墓誌銘并序」（〇は空格、」は改行を示す。）

公諱輪、字曦輪、昌黎棘城人也。(a) 燕文明皇帝煌（皝）之後。紫蒙之野、始其邑焉、鮮卑之山、發」其原也。家承簪紱、姓氏因冠、門習干戈、英威動晉、備乎國史、可得而詳。祖忠、右衛大将」軍、列在王庭、則人臣之首、退居河朔、為異方至尊。父宣超、贈驃騎大将軍、兼范陽郡大」都督。出自高峯、偏當秀氣、恭承玉冊、保壽金章。公蘭桂之下、芳香自然、幼志夙成、風神」早慧。(b) 年十一、則治兵閤門、横行瀚海。留情三略、獨運六奇、遂得寵入勳司、位高勇将。開」元七載、解褐左武衛郎将、兼閤門府都督、借紫金魚袋。甘羅上卿之歳、然在青襟、張強」侍中之年、雖無弱冠、方之早仕、彼而有慙。(c) 公以明略佐時、雄圖務賛、叅謀武帳、洞晤兵」機。事君榮君、則為官族、将門有将、還入公臣。(d) 廿二載、遷左武衛中郎将。其少也、以智謀」見拔、其壮也、以雄才入選。伏石為虎、無以擬其彎弧、竹林逢猿、不足當其舞劍。加以鑄」鼎世襲、廊廟相傳、公侯子孫、必復其始。(e) 廿七載、有詔冊封烏地野拔勤豆可汗、兼安樂」州都督・吐谷渾使。(f) 命将用於昭陽、欲苞卷於六合、登壇取於韓信、擬清平於天下、公之」此授、君有心焉。實深撫禦之能、不無身手之用。西山盜賊、秋塵不飛、北

(8) 本翻訳では拓本を掲載できないため録文に空格と改行部分を示した。また墓誌文の文字について、訳者が周氏の簡体字録文と王国玉論文に掲載される繁体字録文・拓本および平田訳注とを比較参照して改めた部分があるが、論旨に影響しないため一々明記しない。また可能な限り墓誌で使用されている漢字を用いた。

なお王国玉論文によれば、墓誌石は陝西省西安市近郊から出土し、墓誌蓋は失われている。墓誌石本体は青石質で正方形、縦・横57cm、厚さ12cm。墓誌文は楷書で、罫線が引かれており、31行×33字である。文字数は988字ある（平田氏が986字と訂正）。平田氏は、本墓誌が拓本しかなく墓誌石の出土状況や現在の所蔵先について言及がないこと、墓誌文の複数の箇所が庾信撰「周大将軍懐徳公呉明徹墓誌銘」の文章の引き写しのような内容であることから、偽刻の可能性もあることを指摘する（平田訳注93～94頁）。

塞匈胡、不敢論」戰。所部偏僻、地實崎嶇、多不訓之人、有無君之政。公示之以德、威之以刑、莫不向日而」傾、從風而偃。名振四海、聲聞六夷。(g) 公往歳在棄乾用兵、与王忠嗣同為裨将、朋交契洽、」忽尓開懐、聚石圖營、澆沙結壘、加臨向背、一時盡申。彼慙謀短智窮、不能屈色下問、悪」居其上、苞蔵禍心、及秉節制、飛言害德。天寶元載、貶授播川郡牂牁鎮将。(h) 江東八千子」弟従項藉而不歸、海島五百軍人為田横而俱死。公麾下亡叛、擬於其倫。(i) 達人知命、曽」無愠色。背闕懐楚、扁舟入吴、鎮山静江，樂得其性。詩禮化俗、歌詠猶傳。君子至之、名不」朽也。○○ (j) 天子上淩烟之閣、先憶舊臣、聞鞞鼓之音、實思良将。八載、除房陵郡志成府」別将。(k) 既備邊鄙之才、方委爪牙之任。霸陵漸近、詞氣逾高、朝端有期、衝冠弥勇。直以鵂」入其舍，棄生井中、不遂夙心、奄然過隙。(l) 其載八月十七日遘疾暴増、薨於房陵郡之賔」舘、春秋卌有三。(m) 荊衡流涕、如祠武侯之庙、老幼掩泣、似望羊公之碑。(n) 十載辛卯歳二月」十九日、寄瘞於京兆長安縣髙陽原之禮 (9) 也。遊魂羈旅、足傷温序之心、玄夜思歸、終有」蘇韶之夢。撫孤修葬、同氣盡心、訓子承家、孀妻剋意。胤子政等至性居喪、涙久松枯、聲」哀鳥集。式旌泉壤、乃述銘云、○鮮山別嶺、餘水分流。率部歸漢、擁騎淩周。幽趙二國、傳」譽千秋。山川雄壮、美孋優柔。乃祖乃父、為王為侯。其一 晉初度隴、唐元入寵。婚納帝系、卓」犖龍種。金柯暐曄、玉葉森聳。海内振威、河朔賈勇。靈武十将、異方一統。其二 遷鎮大江、名」留越郷。房陵萎命、賔舘停喪。棟摧榱折、志士淪亡。明○○主痛惜、親友哀傷。柩歸北里、」魂往西涼。其三 風光催促、旌旐引速。衰柳寒亭、殘花空谷。周勃有悲、田横歌哭。孀妻誓寡、」胤子継族。封土植栢、刻石銘德。其四

墓誌文の冒頭はその祖先と原住地を叙述し、おおむね史籍や上述の諸墓誌と

(9) 平田氏は「髙陽原之□（所あるいは墟）」と一字脱字があるか、「髙陽之原」の一字転倒ではないかと指摘する（平田訳注89頁）。

共通しているが、ただこの墓誌文ではその祖先を「燕文明皇帝煌（皝）の後〔墓誌文下線部（a）〕」とする部分は大変に面白い。按ずるに、上述の唐代吐谷渾王族慕容氏墓誌は、一般的にその祖先を述懐する際、多くは唐が王に封じた諾曷鉢から始まり、「慕容威（神威）墓誌」のみ「前燕高祖廆（慕容廆）の後」と記す(10)。実際に遼東慕容鮮卑の一部族である吐谷渾部は、元来慕容廆の庶兄吐谷渾が分かれて率いた勢力であり、のち西北の青海等の地に移動し、吐谷渾を姓氏と国名にしたのである。その後、吐谷渾の子孫は当然ながら吐谷渾をその祖先としたが、吐谷渾は庶出だったために北方の民族のあいだでも吐谷渾を「野虜[14]」と呼び、地位は比較的低かった。このため唐代という家柄をたっとび、権勢に取り入る風潮がきわめて盛んだった時代では、上述の諸吐谷渾墓誌の撰者が彼らの祖先について述懐するとき、始祖である吐谷渾を避けて掲げないことが多い。あるいは、輝かしい地位を有する慕容鮮卑部系統である吐谷渾の弟慕容廆をもってその先祖とするのである。そして「慕容曦輪墓誌」の記述では、じつに慕容廆の第3子で前燕を建国した文明皇帝慕容皝をその祖先に附会するのだが、これも何ら珍しいものではない。

墓誌文ではまた、曦輪が「年十一なれば、則ち兵を閤門に治め、瀚海に横行す。……。開元七載、解褐し左武衛郎将、兼閤門府都督、借紫金魚袋となる。〔下線部（b）〕」と記す。その11歳はまさに唐開元六年（718）にあたり、彼は「兵を閤門に治め」た。この閤門について、王国玉論文は「宮中の小門」あるいは「中央官署の門」と解釈し、ゆえに墓主は「門蔭によって入仕し、宮中の門を警護する衛兵となったのであり、よくある状況である」と述べる。しかしこの説は誤りである。この閤門とは、唐が涼州に設置した吐谷渾羈縻府州の「閤門州」あるいは「閤門府[15]」を指すと考えるべきである。『新唐書』地理志7下、羈縻州、隴右道には「吐谷渾州一、閤門州。右、涼州都督府に隷す」とある。また『旧

(10)　「慕容威墓誌」の該当部分は「前燕高祖武宣皇帝廆之後」。

14　酈道元『水経注』巻2、河水に「吐谷渾は、始めはこれ東燕慕容の枝庶にして、氏に因り其の字とし、以て首類の種號と爲すなり。故に之を野虜と謂う。」とある。

15　もとは「閤門州」であり、いつ「閤門府」に昇格したのかは考察不可能である。

唐書』地理志3、河西道にも「涼州中都督府……吐渾（吐谷渾）部落・興昔部落・閣（閤）門府・皐蘭府・盧山府・金水州・蹛林州・賀蘭州已上八州府は、並びに縣無く、皆な吐渾・契苾・思結等の部にして、寄せて涼州界内に在り……。」とあり、閤門府はまさに閤門川、すなわち現在の青海省門源一帯に設置されたのである。閤門府が羈縻府州であることは、翌年（開元七年）に唐朝廷が墓主を「左武衛郎将、兼閤門府都督」に任命した点からだけで証明可能である。

事実、その父宣超の在位中に、元来吐蕃の支配下に没していた青海の吐谷渾余部の複数の集団が涼・甘・粛・瓜・沙州等に降る事件があった。武后のとき、涼州都督郭元振が「安置降吐谷渾状」を奉り、涼・甘・粛・瓜・沙州に降った吐谷渾を各州の左側（現在の甘粛省河西祁連山北麓付近）に安置することを提案し、「其の置く所の處、仍りて請うに當處の強明の官人を簡取し、當處において之を鎮遏し……。兼ねて毎に蕃情に達し利害を識る者をして、宣超兄弟一人と共に歳どし往きて巡按し、以て之を撫護せしめんことを[16]。」と述べ、武后は「詔して可とし[17]」た。したがって、ちょうど涼州都督府に隷属していた閤門府（この時期すでに府に昇格していた）は、おのずから宣超の統治下に入ることになったのである[18]。宣超はわずか11歳の庶出の子である曦輪を派遣して先に閤門に従軍させ、翌年彼は閤門府都督に任命されたのであり、これは自然な成り行きだった(11)。そして曦輪と年齢が近くかつ宣超の正室姑臧県主の

16　『通典』巻190、辺防6、吐谷渾。

17　『新唐書』巻221上、吐谷渾伝。

18　また前述「隴西李府君（良僅）墓誌」はその父如暹がかつて「閤府を開く」とあり、その長子の拠が「仍りて閤門府都督を襲う」と記している。この閤府とは閤門府のことであり、唐が閤門川に置いた吐谷渾羈縻府州である。

(11)　吐谷渾羈縻都督府の閤門府については、『新唐書』巻37、地理志1、関内道、延州延安郡条小注に高宗儀鳳年間（676～678年）に涼州に内附した吐谷渾部落を延州金明の西境に置き、閤門と呼んだという記事がある。ここから張国剛氏は、延州金明の閤門府は涼州の閤門州が移ってきたものであり、涼州の閤門府はおそらく儀鳳年間に吐谷渾が延州に内附したのちは名前のみが残り実態は失われたか、あるいは一部の吐谷渾人が残った状態になっただろうと述べる（同「唐代的蕃部与蕃兵」、同著『唐代政治制度研究論集』文津出版社、1994年、99頁）。張氏の説に従うならば、本文にある武后期において郭元振の建言に従い吐谷渾余部を涼・甘・粛・瓜・沙州の左側に処置し

次男であった曦皓は、質子として都の長安に入朝し侍子となった。このことは「曦皓墓誌」で確認できる。すなわち墓誌文には曦皓が「少(わか)くして強蔭を以て千牛備身に補され、尚舎直長を授かる」とあり、その後文にも「超えて尚衣奉御を拝さる」とある。「千牛備身」とは北魏で設置され、千牛刀を執り宿衛侍従する職である。唐でもこれを踏襲しときに奉御と改名したが、中宗の時期に旧名に戻し、高蔭（強蔭）の子弟のみに任命させた正六品の官である。また「尚舎直長」（正七品下）とは、唐の殿中省所属の尚舎局に置かれた尚舎奉御（従五品上）の次官の名称であり、供御（天子の食事）と殿中張設（宮中における儀礼・宴会等の張幕の設営）のことを担当した。「尚衣奉御」とは、尚衣局の官吏で従五品上、天子の衣服を供え、その制度に詳しく、その名や数を弁じ、その進御（天子の行幸）に供えることを担当した[19]。これは庶出の曦輪が質子になれず、入朝侍衛はしたものの閤門府の職しか任命されなかった原因を解明するものである。

「曦輪墓誌」は「閤門府都督」在任時の事跡をつぎのように記す。「公は明略を以て時を佐け、雄圖もて務め賛け、武帳に叅謀し、兵機を洞晤す。……将門に将有り、還た公臣に入る。〔下線部（c）〕」さらに開元二二年（734）に至って「左武衛中郎将に遷る。其の少きや、智謀を以て拔んぜられ、其の壮たるや、雄才を以て選に入る……。〔下線部（d）〕」つまり彼が27歳のとき、任じられた職に功績があったため左武衛中郎将に昇任したのである。これは雑号中郎将の

た事件は、トゥルファン出土「豆盧軍牒」では聖暦二年（699）七月、『新唐書』吐谷渾伝では聖暦三年（700）と記されるから、時間から見れば涼州の閤門府と吐谷渾余部とは関係しないことになる。さらに慕容曦輪が関わった閤門府は延州のものということになる。これに対して平田氏は、涼州のものは羈縻都督府、延州のものは折衝府だと指摘し、同時期に両方に存在しえたとする（平田氏前掲著書、513頁）。

また「隴西李府君（良僅）墓誌」に記される閤門府について、村井は以下の見解を示す。すなわち、墓主の父李如暹が霊武にいたとき、代宗は彼が率いる吐谷渾を中核とする集団に対して新たに羈縻都督府の閤門府を設置し、その後李如暹が延州刺史を拝命したことにあわせて彼らは延州に移動したのであり、これも従来涼州・延州にあった閤門府とは異なる組織だった（村井恭子「唐吐蕃回鶻並存時期的西北辺境 ——以《李良僅墓誌銘》為中心」『文史』2009年第4輯、137～138頁参照）。

19 『唐六典』巻11、殿中省参照。

職で、おおよそ従四品である[20]。

続いて墓誌は「廿七載（739）、詔冊有りて烏地野拔勤豆可汗に封ぜられ、安樂州都督・吐谷渾使を兼ぬ。〔下線部（e）〕」と記す。王国玉論文はこの部分を分析したのち、開元二七年になぜ庶出の曦輪が「烏地野拔勤豆可汗、兼安樂州都督」という重要な職位と称号を勅命によって授かったのか、またなぜ宣超の嫡子である曦光・曦皓がこの職を襲わなかったのかと疑問を呈し、「その疑義についてはなお検討する必要がある」と述べる。そもそも、ちょうど開元二六年（738）には曦光が死去し（「慕容曦光墓誌」参照）、もとの安楽州の吐谷渾部落には指導者が不在となり、嫡子の曦皓は侍子としてずっと長安に居住し長期にわたり安楽州の吐谷渾本部から離れていたのである。この状況において唐朝にとって最も良い選択は、長期間吐谷渾部を統御し閤門府都督であった宣超の庶子曦輪を烏地野拔勤豆可汗兼安楽州都督の名号でもって任命し、安楽州の吐谷渾本部の部衆を綏撫させるものの、（その他の官職を与えず）ただ「吐谷渾使」の名称のみを与えることであった。では曦輪がいつこの重要な職位を解任され、年長の曦光の子慕容兆が改めてその官爵を襲ったのかという問題については、墓誌はその下の「天寶元年、貶して播川郡牂牁鎮将を授かる。〔下線部（g）〕」の部分に記している。まさにこのとき唐朝は兆に祖父宣超の官爵を襲わせたのだろう。

「曦輪墓誌」は続いて彼がこの重要な職位についた経緯と功績についてつぎのように叙述する。「将を命じて昭陽を用い……。公の此の授は、君、心有り。實に撫禦の能を深くし、身手の用無からず。……部する所は偏僻にして、地は實に崎嶇たり、不訓の人多く、無君の政有り。公、之に示すに徳を以てし、之を威すに刑を以てするや、日に向かいて傾き、風に従いて偃せざる莫し。名は

20　『通典』巻29、職官11、雑中郎将条の「武衛中郎将」下注に「魏始めて許褚を以て之と爲す。」とあり、また本文に「大唐無し。」とある。すなわち曦輪が任命された「左武衛中郎将」は、特別に勅命によって与えられた称号であり、おおよそ従四品か五品の武官に相当するものであった。この職は彼が閤門府都督に任命されたときの「武衛郎将」の地位よりもやや高いものである。

四海を振るわし、聲は六夷に聞こゆ。〔下線部（f）〕」ここには過分の賛辞が多いものの、彼が安楽州の吐谷渾本部を統御した事跡も反映されている。

墓誌はさらに「公、往歳棗乾に在りて兵を用い、王忠嗣と同に裨将と為り、朋交は契洽し、……彼、謀短にして智窮まるを慙じ、色を屈して下問する能わず、其の上に居るを悪みて、禍心を苞蔵し、節制を秉るに及び、飛言もて徳を害す。天寶元載、貶して播川郡牂牁鎮将を授けらる。〔下線部（g）〕」と記す。これは墓主の官途と命運が転換する事件であった。王国玉論文では両『唐書』の王忠嗣伝を引用し、まず王忠嗣の生涯を紹介する。つぎに曦輪と王忠嗣が「往歳棗乾に在りて兵を用」いた史実を考察し、「唐史に記載される『棗乾に兵を用う』とは、王忠嗣が参戦した開元二六年（738）の契丹を北伐するため雁門関より出撃し、桑乾河畔で戦ったが、奚・契丹連合軍に全滅を喫した事件と、天宝元年（742）、王忠嗣は霊州都督を兼任し、奚の怒皆と桑乾河で戦い、奚を三度打ち負かしてその大量の人馬を俘獲し、漠北に武威を耀かせ勝利して帰還し、左武衛大将軍を与えられた事件のことである。この2度の戦役については『新唐書』玄宗本紀に明確に記載されている」と述べる。

しかし筆者は『新唐書』玄宗本紀を精読したが、天宝元年十二月庚子に「朔方軍節度使王忠嗣は奚と紫乾河に戦うに及び、之を敗り、遂に突厥を伐つ。」という記事しか見られない。ここには開元二六年に王忠嗣が契丹の北伐に参戦して桑乾で戦ったことはまったく記載されていない。また両『唐書』の王忠嗣伝には、「天寶元年、靈州都督を兼ぬ。この歳北伐し、奚の怨皆と桑乾河に戦い、三たび之を敗り、大いに其の衆を虜とし、武を漠北に耀かし、高會して旋る[21]。」とある。『資治通鑑』巻215、唐天宝元年八月条を見ると、わずかに朔方節度使王忠嗣が突厥烏蘇米施可汗のもとに出征し「兵を磧口に盛んにし、以て之を威」したという記載があり、その下の胡三省注所引『資治通鑑考異』には「新・舊書忠嗣傳皆曰く『この歳、忠嗣北伐し、奚の怨皆と桑乾河に戦い、

21　ここでは『旧唐書』巻103、王忠嗣伝を引用。『新唐書』巻133、同伝もほぼ同じ。

三たび之を敗り、大いに其の衆を虜とす。』と。又曰く『明年再び怨皆及び突厥の衆を破り、これより塞外晏然たり。』と。按ずるに朔方は奚と相い接さず、云う所の奚怨皆とは何たるかを知らざるなり。今之を闕く。」と記される。すなわち『資治通鑑』の撰者は、王忠嗣の桑乾の戦いの記載に対し疑義を抱いており、ゆえにこのことを本文に採択しなかったのである。

もし両『唐書』王忠嗣伝等が記す天宝元年の桑乾河の戦いが確かに事実だったとしても[22]、桑乾河は今の河北省にあり、当時安楽州（治所は今の寧夏回族自治区中衛市鳴砂）にいた曦輪もこの戦役には参加できない。両『唐書』の王忠嗣伝や玄宗本紀等には、開元二六年に王忠嗣が東陽府左果毅都尉に左遷されたとき、河西節度使杜希望が吐蕃の新城（鄯州、今の青海省海東市楽都区一帯）を奪取しようとし、玄宗が詔して王忠嗣を招聘し河西に赴かせ「進みて其の城を抜く。忠嗣録多ければ、左威衛郎將を授け、兵馬を専知せしむ[23]。」というわずかな記録がある。あるいはこのとき吐谷渾安楽府都督の曦輪もこの戦役に参加し、王忠嗣と対立したのもこの戦役だったかもしれないが、墓誌文にある「桑乾に在りて兵を用」いたときではない。ただ墓誌が述べる、曦輪がときに「忠嗣と同に裨将と為り……加えて向背に臨み、一時に盡申す。〔下線部（g）〕」という記載は当時の歴史事実とも符合する。

墓誌の「彼（王忠嗣）、謀短にして智窮まるを慙じ……節制を秉るに及び（王忠嗣は開元二九年功績によって朔方節度使に昇任し、霊州都督を兼ねた）、飛言もて徳を害す。〔下線部（g）〕」という記述について、これは事実か否か証明しがたい問題である。王忠嗣は何度も戦功を立て、のちに節度使にも任命されていることからすれば、はたして「謀短にして智窮ま」り、「其の上に居るを悪」み、それによって「飛言もて徳を害す」るようなことを行っただろうか。筆者はその可能性は低いと思う。墓誌は一般にみな墓主の人柄を持ち上げ賛美

22　この可能性は存在する。『資治通鑑考異』が疑う「奚怨皆」とは奚人であるが、ただしこの名は突厥の姓名あるいは突厥に帰属した奚部落の首領とも解釈できる。
23　『新唐書』巻133、王忠嗣伝。

するための作品であり、撰者は墓主あるいはその子孫の推測や潤色の言葉を軽率に信じたという可能性もある。また筆者は曦輪の左遷についてつぎのように推測する。唐朝は安楽州吐谷渾の勢力を弱め、分裂させるために口実を設けて彼を本部から配置換えし、かわりに青年の曦光の子孫である兆に爵位を襲わせたのだろう。ゆえに墓誌文に「江東八千の子弟……。公の麾下は亡叛し、其の倫（ともがら）に擬えんとす。〔下線部（h）〕」という記述があるのである。総じて、この難解な事件は史籍に記載を欠くため、冤罪事件または真相不明の事件となったのであり、後代の研究者の評論によるしかない。

ともあれ、天宝元年（742）、曦輪は最終的に「播川郡牂牁鎮将」に左遷された。『新唐書』地理志1には、開元十一年（723）に十道のほかにまた「黔中道」を増設し、同書地理志五にはその下に「播州」を領有したとある。『旧唐書』には、播州はもと隋の牂柯（牁）郡であり、貞観十三年（639）に初めて播州を置き、天宝元年に播川郡と改称した。その下に遵義・芙蓉・帯水の3県を管轄したと記されるが、牂牁県はない[24]。ただ郭声波によれば、牂牁県は武徳二年（619）に隋の牂牁の旧県の名にちなんで命名され、また建安県と改められ、牂州に属したという[25]。曦輪が任じられた「播川郡牂牁鎮将」とは、まさに播川郡（治所は今の貴州省遵義市）に置かれた「鎮」の鎮将である。按ずるに、唐代の兵制では「兵の邊を戍る者、大曰く軍、小曰く守捉、曰く城、曰く鎮、而して之を總ぶる者曰く道[26]。」とある。そして播川郡に設置された「鎮」は、隋以来この地の「牂牁」を借りて名としたものである。この地区は少数民族（蛮夷）が集住する土地であり、ゆえに墓誌文はその任務の内容について「達人は命を知り、曽て慍色無し。……詩禮もて俗を化し、歌詠の猶お傳わるがごとし。君子ここに至り、名は朽ちざるなり。〔下線部（i）〕」と記している。

墓誌は続いて「天子淩烟の閣に上り、先に舊臣を憶い……實に良将を思う。

24　『旧唐書』巻40、地理志3、江南西道、黔州下都督府、播州条参照。
25　郭声波著『中国行政区画通史』唐代巻（下冊）、復旦大学出版社、2012年、771頁参照。
26　『新唐書』巻50、兵志。

八載、房陵郡志成府別将に除せらる。〔下線部（j）〕」と記す。天子が旧臣を思い、良将云々というというのはおそらく撰者による賛美の言葉だろう。というのも、墓主は天宝八年（749）に朝廷により安楽州あるいは首都長安に昇任で召し戻されたのではなく、ただ「房陵郡志成府別将」に任命されただけだったからである。房陵郡とは、すなわち隋の房陵郡の地で、唐初に遷州と改名され、貞観十年に遷州を廃してその地を房州に移管し、もとの遷州城を治所とした。天宝元年に房陵郡と改名され（治所は今の湖北省房県）、乾元元年（758）に房州に名を戻し、その下に房陵・永清・竹山・上庸の4県を領した[27]。曦輪が任命された「房陵郡志成府別将」とは、まさに房陵郡の府兵制下の「志成」と名付けられた折衝府に設置された職である。唐制では折衝府には「折衝都尉一人、左右果毅都尉各一人、長史・兵曹・別将各一人、校尉六人を置[28]」いた。墓誌の撰者がたとえ文中でその任命について「既に邊鄙の才を備え、方に爪牙の任を委ねらる。〔下線部（k）〕」と述べていても、曦輪は房陵郡志成府のなかの中下級武官（別将）となったのであり、実際には降格であった。ここから想像すれば、曦輪は転任後、志を得ず鬱々とした心境にありまた精神的な打撃を受けていたと思われる。ゆえに墓誌文には、房陵郡に着いたのち「其の載八月十七日疾に遘いて暴かに増し、房陵郡の賓館に薨ず、春秋卌有三。〔下線部（l）〕」と記される。すなわち天宝八年（749）、わずか43歳で房陵郡の賓館で病没してしまったのである。面白いことに、曦輪が着任しておそらくたった数ヶ月であるのにもかかわらず、墓誌文では依然として「荊衡の流涕するは、武侯（諸葛亮）の庶を祠るが如く……。〔下線部（m）〕」という褒め言葉でもって賛美するのを忘れないのである。

墓誌文は引き続き「十載辛卯の歳二月十九日、京兆長安縣高陽之原の□に寄瘞す。禮也。〔下線部（n）〕」と記す。つまり曦輪の死後2年目（751）に、遷葬して京兆府長安県高陽原（今の西安市長安区郭杜）に寄葬したのである。京師

27　『旧唐書』巻39、地理志2、房州条参照。
28　『新唐書』巻50、兵志。

長安に彼を寄葬することができたのは、おそらくその弟曦皓（762年死去、高陽原に埋葬）らの助力と関係するだろう。墓誌文は以下、曦輪の寡婦と嗣子政らの彼の葬儀における哀痛の情を叙述するが、これについては贅言しない。

結語

近代以来、中国の学者は中古時期に出土した歴代王朝の墓誌（墓誌銘）についてみな十分に重視してきた。学者は墓誌の整理・録文・標点・考察および伝世文献との対照などの基礎的な研究作業を行ったうえで史学に採用し、関連する多くの学問分野の理論や方法までも墓誌に応用し、中国古代の政治・軍事・文学芸術（墓誌文・書道・図案等）・民族と民族の関係・歴史地理、さらには社会生活（婚姻・家庭・習俗等）および墓誌本体（書道・図案・家系図との関係・文章の書き方と書式）等各方面で総合的な研究を行い、その成果は中国古代の歴史研究を前進させ革新させる役割をはたしている。たとえ国内の学者の墓誌研究の多くがあるひとつの角度からのものであったり、あるいは基礎的な研究であったり、あるいは多くの学問分野の総合研究であったり、また研究成果の学術レベルにも高低の差があったり、あるいはいささかの問題があったとしてもである。総じて述べるなら、基礎的な研究であれ、一歩進んだ総合研究であれ、墓誌が発揮する歴史学的な機能と作用に対してみな大いに裨益するところがあり、いずれも欠くことができないものである。

上述の吐谷渾人に関する出土墓誌の学術研究史から、以上の認識を証明することもできる。以下では、すでに発見され公表された20点の吐谷渾出土墓誌についてひとつの総合的な考察を行ってみたい。

（1）既知の20点の吐谷渾墓誌から墓主の身分および墓誌の時間と空間の分布について知ることができる。

既知の20点の墓誌のうち、吐谷渾王族の吐谷渾氏と慕容氏の墓誌には以下

のものがある[29]。北魏時代の「吐谷渾璣墓誌」、唐代の「慕容明墓誌」「慕容忠墓誌」「慕容宣昌墓誌」「慕容宣徹墓誌」「慕容威（神威）墓誌」「慕容曦光墓誌」「慕容曦皓墓誌」「慕容曦輪墓誌」「慕容瓌墓誌」の合計10点である。さらに吐谷渾「大族」の「李府君（良僅）墓誌」を加えると合計11点で、おおむね20点の半分以上となる。

吐谷渾王族の女性と中国内地の貴族あるいは北朝・唐朝の貴戚との婚姻に関する墓誌には以下のものがある。北魏時代の「魏故武昌王（元鑑）妃吐谷渾氏墓誌」、北斉時代の「吐谷渾静媚墓誌」、西魏時代の「吐谷渾暉華公主墓誌」、唐代の「交河郡夫人慕容氏墓誌銘」の合計4点である。そのほか唐朝宗室あるいは貴戚で吐谷渾王族に嫁いだ女性の墓誌には「大周西平公主（弘化公主）墓誌」「大唐金城県主墓誌」「大唐故武氏墓誌」「大唐隴西郡夫人李氏（名は深）墓誌」の合計4点がある。

以上の19点に、さらに唐代に出家し尼となった吐谷渾公主「成月公主墓誌」を加えると全部で20点の墓誌となる。

墓誌の時代から見ると、北朝期（北魏・西魏・北斉）の墓誌が合計4点、唐代では合計16点ある。

墓誌の出土地に関して、北朝期では北魏の首都洛陽から出たものが2点、北斉の都城鄴城附近から1点、西魏の都城長安から1点の合計4点である。唐代では吐谷渾の先塋がある涼州神烏県陽暉谷（今の武威市南山青嘴・喇嘛湾）のものが最も多く9点あり、そのつぎが唐の首都長安（今の西安市長安区）で4点、唐の吐谷渾長楽州（今の寧夏回族自治区同心県韋州一帯）で1点[30]、唐の延州（治所は今の陝西省延安市）で1点、唐の金城郡薄寒山（今の甘粛省蘭州市興龍山）で1点の合計16点となる。

29　北朝期の吐谷渾王族は吐谷渾氏を姓とし、隋代に夸呂可汗が死去したのち「還た慕容を以て姓と爲し」た。『通典』巻190、辺防6、吐谷渾参照。

30　唐は吐谷渾本部に安楽州を設置し、のちまた東に長楽州を設置して安楽州と長楽州の二州となり、これらはともに吐谷渾羈縻州であった。周偉洲「唐代的安楽州与長楽州」（『西北史地』1987年第3期）参照。

北朝の吐谷渾墓誌が各王朝の都城附近から出土していることから見れば、その墓主は当時内地の王朝に帰順した吐谷渾の貴戚で、多くは朝廷の中央官に任命された者、あるいは王公貴族に嫁いだ者である。唐代では、龍朔三年（663）に吐谷渾が吐蕃に滅ぼされてから安史の乱前までにおいて、吐谷渾の先塋の地、すなわち今の武威市南山青嘴・喇嘛湾は吐谷渾王族の主要な墓葬地であり、9点の墓誌が出土した。今後も墓誌が出土する可能性があるだろう（慕容諾曷鉢の墓誌も含めて）[31]。当時内地で死去した慕容神威・曦光のような吐谷渾王族も吐谷渾先塋に遷葬された。しかし安史の乱後においては、吐谷渾先塋および安楽等の州は前後して吐蕃に占拠され、このときより吐谷渾王族の葬地はいささか首都長安に集まるようになったのである[32]。

以上20点の墓誌の葬地の分布は、おおむね北朝から唐代に内地に移動した吐谷渾王族・貴戚の分布および活動していた地域を反映するだろう。しかし、史籍に記される唐代吐谷渾政権滅亡ののち、吐谷渾王族とその部衆が内地に移住した状況はより複雑となり、分布もより広範囲となって、現在の甘粛河隴・寧夏・陝西・内モンゴル・山西・河北等の地に彼らは居住した。筆者は今後、上述の20点の墓誌の出土地だけでなく、吐谷渾人が活動したより広い地域で彼らに関する墓誌が続々と発見されたり新たに出土したりするだろうと信じている。

（2）20点の墓誌は吐谷渾の世系と官爵名号の情報を増補させた。

墓誌というものの最も主要な特徴のひとつは、一般に墓主一族の来源と世系および官爵名号を比較的詳細に記載することである。すなわちこれは学者たちが墓誌を研究する際に最初に注意する問題である。なぜなら墓誌によって史籍の記述の不足を増補できるだけでなく、唐朝の吐谷渾王族・貴戚への態度や政策またその変化、吐谷渾王族の漢化の軌跡等をある面から映し出しているからである。たとえば北魏洛陽出土の2点の吐谷渾墓誌から、北魏に帰投した一派

31　前掲周偉洲「武威青嘴喇嘛湾出土大唐武氏墓誌補考」参照。
32　以上論じたことについては前掲陳瑋「新出唐吐谷渾王族慕容環墓誌研究」を参照。

の吐谷渾王族の世系が整理できる[33]。また上述のごとく墓誌をもとに宣超の4子の状況も考証できる。さらに出土した2点の吐谷渾公主の墓誌から、吐谷渾王族の女性について補い知ることができる。

墓誌の記述にある歴代王朝の吐谷渾王族に対する封号とその変化、たとえば可汗・青海国王・大同軍使・朔方軍節度副使・朔方副元帥等に関しては、唐朝の彼らに対する政策およびその変化、また彼らと朔方等の辺境軍鎮との関係を反映している[34]。さらに墓誌に記される吐谷渾の漢姓や、墓誌そのものも含む漢族風の葬送の習俗は、ともに内地に移住した吐谷渾王族・貴戚の漢化の軌跡を反映するのである。

（3）墓誌は比較的詳細に吐谷渾王族と他民族との婚姻関係を記述する。

墓誌というものについて、そのもうひとつの主要な特徴は、一般にみな比較的詳細に墓主あるいはその親族の婚姻の状況を記載することであり、その内容は往々にして史籍に記されていないことが多い。この点も学者たちが墓誌を研究する際にとくに注目する問題のひとつである。たとえば北朝期の4点の吐谷渾王族墓誌を見れば、北魏では武昌王元鑑（拓跋鮮卑）と婚姻関係を結んだもと吐谷渾主阿柴の後裔吐谷渾氏がおり、また吐谷渾王伏連筹（死後の諡「明元」）の第四女庫羅伏（暉華公主）は西秦滅亡後に吐谷渾に入り車騎大将軍となった乞伏孝達（乞伏鮮卑）と結婚し、その姉は漠北の柔然阿那瓌可汗と結婚してその可敦となった[35(12)]。北斉では吐谷渾阿柴の後裔吐谷渾璣（字は龍宝）の弟仲宝の娘吐谷渾静媚が北斉の驃騎大将軍堯峻（漢族）と結婚したなどの状況が判明する。この種の複雑な各民族間の婚姻関係は、北朝期における北方民族の融合の趨勢を反映している。

唐代の10余点の墓誌では、吐谷渾慕容氏と唐宗室や外戚武則天の兄弟の孫

33　前掲周偉洲「河北磁県出土的有関柔然、吐谷渾等族文物考釈」を参照。
34　前掲李鴻賓「慕容曦光夫婦墓誌銘反映的若干問題」を参照。
35　これについては、筆者は別稿で考察する予定である。
(12)　この論文はすでに周偉洲「吐谷渾暉華公主墓誌与北朝北方民族関係」（『民族研究』2020年第2期、112～118頁）として発表された。

娘および高級貴族（たとえば博陵崔氏・河南穆氏）との婚姻関係が見られ、前述した多くの学者の研究成果が発表されている。とくにある研究論文は、さらに7世紀から8世紀にかけての唐と吐谷渾との婚姻関係を総合的に研究しており、その内容から唐の吐谷渾に対する政策の変化および影響が確認できる[36]。

（4）史籍の記述への増補・是正および歴代王朝の政治・軍事制度・民族政策・民族関係・歴史地理等の各方面に対して、墓誌は重要な機能と意義を有する。

たとえば「慕容曦光墓誌」は、墓主が参加した開元九年（721）に唐が平定した六胡州の「康待賓の乱」について情報を補う[37]。また「慕容曦輪墓誌」は、唐が涼州に置いた吐谷渾羈縻州「閤門州」の史実を補う。さらに「慕容威墓誌」の墓主が「長楽州游奕副使」に任命されたという記述から、唐代吐谷渾羈縻府州の安楽州と長楽州の設置および地理位置の問題について研究が行われた[38]。そして「慕容曦皓墓誌」は、両『唐書』吐谷渾伝に曦光と曦皓が誤って同一人物として記載されていることを是正する。また上述のごとく吐谷渾王族の墓誌は、唐代における四夷の「入侍」制度および「童年入侍し、その軍功と考績によって少しずつ越えて昇進」させる民族政策を反映している。またたとえば墓誌の婚姻関係・官爵名号・籍貫郡望等の方面でも、歴代の民族政策・民族関係および政治軍事・行政管理制度、さらには民族の移動や融合といった事象までも反映しているのである。当然ながら、墓誌の記載についても決して完全に信用することはできない。なぜなら、古代の墓誌は元来墓主を褒め称えるために作成されたものであり、その文中には過剰な賛美や墓主の過ちを隠蔽する部分が多く含まれるからである。したがって、墓誌の記述についてはさらに具体的な分析を行わねばならず、そうしてはじめて歴史事実に符合する結論を出すことができるのである。

（5）20点の墓誌では、墓誌本体の文体・書式・典故の応用および書道芸術

36　前掲杜林淵「従出土墓誌談唐与吐谷渾和親関係」、李鴻賓「慕容曦光夫婦墓誌銘反映的若干問題」等の論文を参照。
37　前掲夏鼐「武威唐代吐谷渾慕容氏墓誌」を参照。
38　前掲周偉洲「唐代的安楽州与長楽州」を参照。

について、また家系との関係等の方面の研究も大変重要である。

これについては従来の学者はあまり言及していないので、今後さらに研究を強化するべきである。

【附記】本論文の翻訳および書式・構成の変更については周偉洲教授の快諾を得た。また本稿作成にあたり北京大学栄新江教授、浙江大学馮培紅教授、沼津工業高等専門学校平田陽一郎准教授などの方々から情報提供等の助力を得た。諸氏に対し感謝の意を表したい。なお本稿脱稿後、吐谷渾に関する新しい考古調査の報道が2件あった。ひとつは、王国時代に王城として用いられた伏俟城（青海省）の調査が行われ、城郭の状況のほかに、文字瓦や陶器片などの発見について報告された（「吐谷渾“王者之城”――青海伏俟城談探調査的突破性新発現」https://mp.weixin.qq.com/s/6UwWC8wdXQ8Ra2qRV6LIJg、2021年2月3日閲覧）。もうひとつは、8世紀中葉吐蕃支配下の吐谷渾に関するもので、青海省都蘭の「2018血渭一号墓」から出土した銀印が古チベット文字で吐谷渾王（阿夏王・阿柴王）の名を刻しており、この陵墓が吐谷渾王（莫賀吐渾可汗）のものと推定された（「“外甥阿柴王之印”血渭一号墓墓主人身份和族属確定！専家論証：青蔵高原画時代的重要発現！」https://mp.weixin.qq.com/s/oZnPDKKRKeCbWM2-jYfmTg、2021年2月3日閲覧）。ともに詳しい状況については、今後の正式な調査報告を待たねばならない。

本稿はJSPS科研費17KK0026の助成を受けたものである。

〔附録１：慕容瓌墓誌〕　※記号：○は空格、」は改行を示す（以下同じ）。

○故朔方副元帥防秋兵馬使金紫光禄大夫張掖郡王慕容」

○府君墓誌銘并序○○○○○○孤子挙進士湯撰并書」

府君諱瓌、字琢璧、其先紫蒙之裔、昌黎棘城人也。當十六代祖、」前燕析居白蘭之陰、遂為東西慕容。代襲后雄、盛出于戎狄。常」與華皇連姻通好、故其王閭戸之内討典則禮類乎華邦。若臨」彼部、異服殊音、以親俗也。自後魏至梁・随（隋）・○唐、每代尚主、婚連」皇戚、侈貴[崇]極。髙祖志烈、字諾鉢、○唐使尚書唐儉冊可汗・青」海國王、駙馬都尉。妣西平大長公主。曽祖忠、字大海、嗣可汗・青」海國王、工部尚書。妣金城縣主。祖宣超、字上仙、○唐使衛尉卿」唐休璟持節冊嗣可汗・青海國王。妣姑臧縣主。父相、字千尋、改」就字。一子出身、歴太僕少卿。属胡逆乱邦、公素□槩有略、乃脱」朝服、緝本部東討、旋旆。○肅宗以功殊澤越諸将。廣徳年遇疾、」終原州。○詔俾備羽葆、葬國城西南隅之義陽鄉南姜里、贈楊（揚）」州大都督。妣河南穆氏。府君、卿之第四子、性果憤[戎]呑河源、誓」殄。一子出身、不就選。年十八、為千夫之長。秉鋋朔[陲]、陲績着（著）聞、」乃授階列。嗚呼、冥茫不輔于誠、降疾去職。貞元十[七]年二月、終」池陽墅第、時年四十八。兆時凶、厝于堂。今元和十[四]年八月廿」六日、乃吉、啓○殯遷于○卿之闕裏庚穴。有子三[人]、孟曰湯。仲」曰著、不幸早卅。季曰萇。湯等疊酷、微生苟存、爰嗣○奠享。不才」之文、粗紀○先[卌]。謹為銘曰

○伊昔祖先、系于[軒]皇。継踵后長、」迄于○我唐。我唐穆穆、我[姻]○帝族。我姻之榮、孰不○来庭、邊」徼不虞、○王室以寧。惟祖之基、[萌]于[来]裔。[剿]乱是専滅戎為誓。」於戯、天目靡視于徳。俾同脩（晞）露、美志[終]塞。孤嗣蓼心、親朋憫默。」松柯森吟、隣乎○王國。九尺之墳、終南之北、○其原曰髙陽原。

【補注】

西安市長安博物館編『長安新出墓誌』（文物出版社、2011年、238～239頁）および呉敏霞主編『長安碑刻』（陝西人民出版社、2014年、上冊（拓本）164頁、下冊（録文）517頁）

掲載の拓本および録文を参照して移録した（両書の録文には文字の異同がある）。ここでは可能な限り墓誌に使用されている異体字を使用した。また父祖名に欠筆が施されているが正字で示した。墓誌蓋は失われており、長安博物館に所蔵されている墓誌石本体は1辺39cmの正方形で、墓誌文面の規格は24字×24行。拓本写真では墓誌中央部に円形の傷が見える。

墓主の父慕容相は慕容宣超の庶子で、嫡流の慕容曦光・曦皓とは母違いの兄弟となる。慕容曦輪も慕容宣超の庶子だが慕容相とは異なり「曦」字を配されている。この違いについて原因は不詳だが、母方の身分の違いによる、あるいは平田氏の指摘の如く「慕容曦輪墓誌」が偽刻である等の要因が考えられる。

〔附録２：暉華公主墓誌〕

茹茹驃騎大将軍俟利莫何度支尚書金城王乞伏」

孝達妻暉華公主吐谷渾氏墓誌銘」

公主諱庫羅伏、字尉芮文、吐谷渾主明元之第四女」也。迺祖迺考、世君西域。既鵲起而闢土、亦帋視以稱」雄。斯乃備之於簡素、可得而略矣。主茹茹可敦之妹、」即○悼皇后之姨也。公主之稱、始自本國。 金城初仕」於吐谷渾、為車騎大将軍・中書監。渾主重其器望、遂」以妻之。若夫窈窕之譽、藉甚於椒芳、煩辱（縟）之功、有聞」於權木。四教既閑、百兩云萃。婦徳内融、母儀外肅。又」從夫至於茹茹、親戚礼遇、莫之与先。○悼皇后来歸」也、金城以姨聟之重、作上賓於魏。時主及三子亦從」此行、婉若春風、皦如秋月、光儀容止、式諧典度。方調」琴瑟、永訓閨庭、而偕老之願未申、朝露之危奄及。春」秋卅有九、以大統七年正月甲午卒於萇（長）安。○皇帝」悼之、塟以公主之礼。生遠其郷、死異其地。徳音雖在、」形顔已歇。嗟行之人、惜而涙下。粤二月己酉窆於山」北縣小陵原。乃作銘曰」

昭昭列星、乃降斯靈。誕茲閑淑、既素且貞。来儀君子、」作賓上京。規矩其度、蘭菊其馨。方申介祉、式範宮庭。」豈期舟壑、奄望佳城。銀海雖湛、玉桂不榮。傷哉玄夜、」已矣泉扃。

【補注】

陝西省考古研究院 他「陝西西安西魏吐谷渾公主与茹茹大将軍合葬墓発掘簡報」（『考古与文物』2019年第4期、36～60頁）および陝西省考古研究院編『陝西省考古研究院新入蔵墓誌』（上海古籍出版社、2019年、拓本4頁、録文229頁）に掲載された拓本と録文とを参照して移録した。ここでは可能な限り墓誌に使用されている異体字を使用した。

前者の発掘報告によれば、墓誌は墓室入口に2点（暉華公主と乞伏孝達のもの）置かれ、ともに青石質である。夫の乞伏孝達の墓誌（M2:1）は、盝頂方形の墓誌蓋があるが刻銘されていない。墓誌面は13列の縦の罫線が陰刻されており、欄内に朱砂で墓誌文が書かれているが、文字の大多数は付着していた土とともに脱落し、残った少数の文字もはっきりとは読めない。墓誌蓋は1辺38.3cm、刹面の幅5cm、盝頂の1辺は30.5cm、厚さ11.5cm。墓誌本体は1辺39cm、厚さ10.7cmである。暉華公主の墓誌（M2:2）は、墓誌蓋は残っていない。墓誌面には縦横の罫線が20字×21行の規格で陰刻されている。文字は楷書で書かれており、全部で385字ある。文中、「悼皇后」と「皇帝」の前に1文字分の空格がある。墓誌本体の大きさは横49cm×縦43cm×厚さ13cmである。

墓誌内容についての考証は本文補注（12）の周偉洲氏の論文と、羅新「西魏暉華公主墓誌所見的吐谷渾与柔然名号」（『中山大学学報（社会科学版）』2020年第5期、124～127頁）を参照されたい。

〔附録３：成月公主墓誌〕

大唐興聖寺尼成月公主□氏墓誌」

若夫千輪謝色、寂懸解於重昏、百影留龕、沈妙門於積晦。閟定」流而逝彩、遽移鯷壑、撲慧燈而掩照、久閟龍銜。其有獨鑒玄宗、」得髻珠於罔象、窮幽粹理、架心臺於槀籥、仁舟廣汎、其在我法」師乎。成月公主諱□□、吐溶（裕）渾可汗海國王慕容鉢第二女也。」尒（爾）其濬源驚箭、孕蟦寶而涵漪、喬屺披蓮、挺虹珪而積仞、固以」銀黄疊暎、駕八虬而齊軫、軒冕交陰、淩三鳳而遐躆（踞）。祖及父並」嫡嫡相承海國王、竝襟情爽秀、風局清敞。望東山而闢府、價蘊」連城、耿南州而飛鋒、光合剸草。法師儀真獨運、乘玄戾正（止）。珠胎」既剖、即開明月之暉、玉樹初標、遠擢甘泉之秀。在乎髫齔、識昭」空寂。仰化城而警策、絶想鵷臺、去火宅以駢馳、栖神鹿野。自落」髮繢服、虔精玄觀、沈研九部、既無懈於晨昏、翹讚千蓮、固忘劬」於涼暑。至若龍宮妙典、貝譚英詞第一、解脱之門不二。難思之」賾、莫不

探微摠隩、似萬流之赴金樞、摭實遺賓、若千象之開玉」鏡。故能擯情塵滓、澹想真如。坐燈玉之牀、自標先覺、啓維摩之」室、爰稱獨步。所談唯空慧、不以俗網嬰懷、所務止玄虚、每用無」爲入賞。豈非形存理勝、望寶階而咫尺、神凝道寂、俯金地而鄰」畿者哉。既而水月澄規、未駐驚波之色、空雲卷靄、遽滅從鳳之」影。以總章元年四月七日卒於興聖寺、春秋廿三。仍以其年十」一月廿二日、葬於明堂縣少陵原。嗚呼泡影、遂誌銘曰」

玄津産玉、法海韜璣。自開虹照、還吐驪暉。偶質齊光、聯文合絢。」泛華蘭掖、飛芳楓殿。乘真詣理、控解窮幽。曽攀道樹、虚汎仁舟。」香巖委崿、漣河閲水。方去花臺，永遵蒿里。鶴林霜積、魚山梵空。」魂兮莫返、泣盡秋風。」

【補注】

李浩「新見唐代吐谷渾公主墓誌的初歩整理研究」（『中華文史論叢』2018年第3期、1～26頁、のち同著『摩石録』聯経出版、2020年に収録）に掲載。本論文には附録として墓誌の拓本写真も掲載されるが（22頁）、画像が不鮮明で判読不可能な文字が多い。ここでは李氏の繁体字の録文（6～7頁）と拓本の判読可能な部分とを参照して移録した。本墓誌には墓誌蓋があり、附録に写真が掲載される（21頁）。墓誌蓋は覆斗型で底辺は1辺71cm、上辺は1辺54cm、篆書で「大唐成月公主墓誌銘」（3字×3行）と刻字されている。墓誌本体は71cm×71cm（厚さは不明）で、24字×24行の規格である（拓本写真では縦横の罫線が見える）。

墓主は慕容諾曷鉢の次女で、唐太宗貞観二十年（646）に生まれ、高宗総章元年（668）に長安城通義坊にあった興聖寺で死去しており（享年23）、尼僧であった。

〔附録4：吐谷渾関係墓誌一覧（全21点）〕

北朝

No.	誌主	墓誌蓋	墓誌題	出土地	墓誌石収蔵	拓本･録文情報
1	吐谷渾璣（龍宝）	－	魏故直寝奉車都尉汶山侯吐谷渾璣墓誌	河南・洛陽	西安碑林博物館	梶：171 周：57-58
2	吐谷渾氏	－	魏故武昌王妃吐谷渾氏墓誌銘	河南・洛陽	西安碑林博物館	梶：443 周：58

No.	誌主	墓誌蓋	墓誌題	出土地	墓誌石収蔵	拓本･録文情報
3	吐谷渾庫羅伏 （尉芮文）	–	茹茹驃騎大将軍俟利莫何度支尚書金城王乞伏孝達妻暉華公主吐谷渾氏墓誌銘	陝西・西安	陝西省考古研究院	本稿附録2参照
4	吐谷渾静媚	斉故堯公妻吐谷渾墓誌之銘	故驃騎大将軍開府儀同三司征羌県開国侯堯公妻吐谷渾墓誌銘	河北・磁県	磁県文物保管所	梶：870 周：59-60

唐代（2019年新出「慕容智墓誌」を含む）

No.	誌主	墓誌蓋	墓誌題	出土地	墓誌石収蔵	拓本･録文情報
1	弘化公主 ［慕容諾曷鉢妻］	大周故西平公主墓誌	大周故弘化大長公主李氏賜姓曰武改封西平大長公主墓誌銘并序	甘粛・武威	武威文廟 （→武威市博物館新館）	氣：3272 周：62-64
2	慕容忠 ［諾曷鉢子］	大周故青海王墓誌銘	周故鎮軍大将軍行左豹韜衛大将軍青海国王烏地也拔勤豆可汗墓誌銘并序	甘粛・武威	武威文廟 （→武威市博物館新館）	氣：3273 周：64-66
3	李季英 ［慕容忠妻］	大唐金城県主墓誌銘	大唐金城県主墓誌銘	甘粛・武威	武威文廟 （→武威市博物館新館）	氣：4455 周：66
4	成月公主 ［諾曷鉢次女］	大唐成月公主墓誌銘	大唐興聖寺尼成月公主□氏墓誌	陝西・西安	夏州絲綢之路博物館	李浩論文 本稿附録3参照
5	慕容智 ［諾曷鉢三子］	大周故慕容府君墓誌	未公開	甘粛・武威	甘粛省考古学研究所	未公開
6	慕容宣昌（煞鬼） ［慕容忠子］	大唐故政楽王墓誌銘	大唐故政楽王慕容君墓誌并序	甘粛・武威	武威文廟 （→武威市博物館新館）	氣：3741 周：67-68
7	慕容宣徹 ［忠子］	大唐故輔国王慕容誌	河東陰山郡安楽王慕容神威遷奉墓誌并序	甘粛・武威	武威文廟 （→武威市博物館新館）	氣：3898 周：68-69
8	慕容明（坦）	大唐故代楽王上柱国慕容明墓誌之銘	押渾副使忠武将軍右監門衛中郎将員外置同正員検校閣甄府都督摂左威衛将軍借紫金魚袋代楽王上柱国慕容明墓誌銘	甘粛・武威	武威文廟 （→武威市博物館新館）	氣：5672 周：71-72

No.	誌主	墓誌蓋	墓誌題	出土地	墓誌石収蔵	拓本･録文情報
9	李深 ［慕容若妻］	大唐故夫人 李氏墓誌	大唐隴西郡夫人李氏 墓誌銘	甘粛・ 武威	武威文廟 （→武威市博 物館新館）	氣：4434 周：76
10	慕容曦光（晟） ［慕容宣超長子］	大唐慕容府君 墓誌銘	大唐故朔方軍節度副 使兼知部落使金紫光 禄大夫行光禄卿員外 置同正員五原郡開国 公燕王上柱国慕容曦 光墓誌銘	甘粛・ 武威	武威文廟 （→武威市博 物館新館）	氣：5674 周：72-74
11	武氏 ［慕容曦光妻］	大唐故武氏 墓誌之銘	唐朔方軍節度副使金 紫光禄大夫行光禄卿 上柱国五原公燕王慕 容公故妻太原郡夫人 武氏墓誌銘并序	甘粛・ 武威	武威文廟 （→武威市博 物館新館）	氣：5510 周：75-76
12	慕容曦皓（曦皓） ［宣超子］	唐故慕容府君 墓誌銘	唐故大同軍使雲麾将 軍左武衛大将軍寧朔 県開国伯慕容公墓誌 銘并序	陝西・ 西安	西安市小雁 塔文物保管 所	氣：7186 周：74-75
13	慕容曦輪 ［宣超庶子］	不明	唐故中郎将開国伯慕 容府君墓誌銘并序	陝西・ 西安	不明	王国玉論文 平田訳注 本稿第3章参 照
14	慕容儀（輔賢） ［宣超娘］	－	故交河郡夫人慕容氏 墓誌序	甘粛・ 楡中県	甘粛省楡中 県博物館	周：77-78
15	慕容威（神威） ［慕容宣徹子］	－	大唐故左領軍衛大将 軍慕容□□君誌銘并 序	寧夏・ 同心県	寧夏回族自 治区博物館	氣：6932 周：69-71
16	慕容瓌（琢璧） ［宣超孫］	－	故朔方副元帥防秋兵 馬使金紫光禄大夫張 掖郡王慕容府君墓誌 銘并序	陝西・ 西安	長安博物館	氣：8966 （慕容環墓誌） 周：78-79 本稿附録1参 照
17	李良僅	大唐故李府君 墓誌銘	唐故特進検校工部尚 書使持節都督延州諸 軍事行延州刺史充本 州防禦左神策行営先 鋒安塞軍等使兼御史 大夫上柱国隴西李府 君誌銘并序	陝西・ 延安	延安市宝塔 区文管所	氣：9352 （李良墓誌） 周：79-81 延：376-377

［注］

・「誌主」欄の（ ）は当該墓誌に記される字、［ ］は家族関係を補記した。

・「拓本・録文情報」欄の略称については以下の通り。

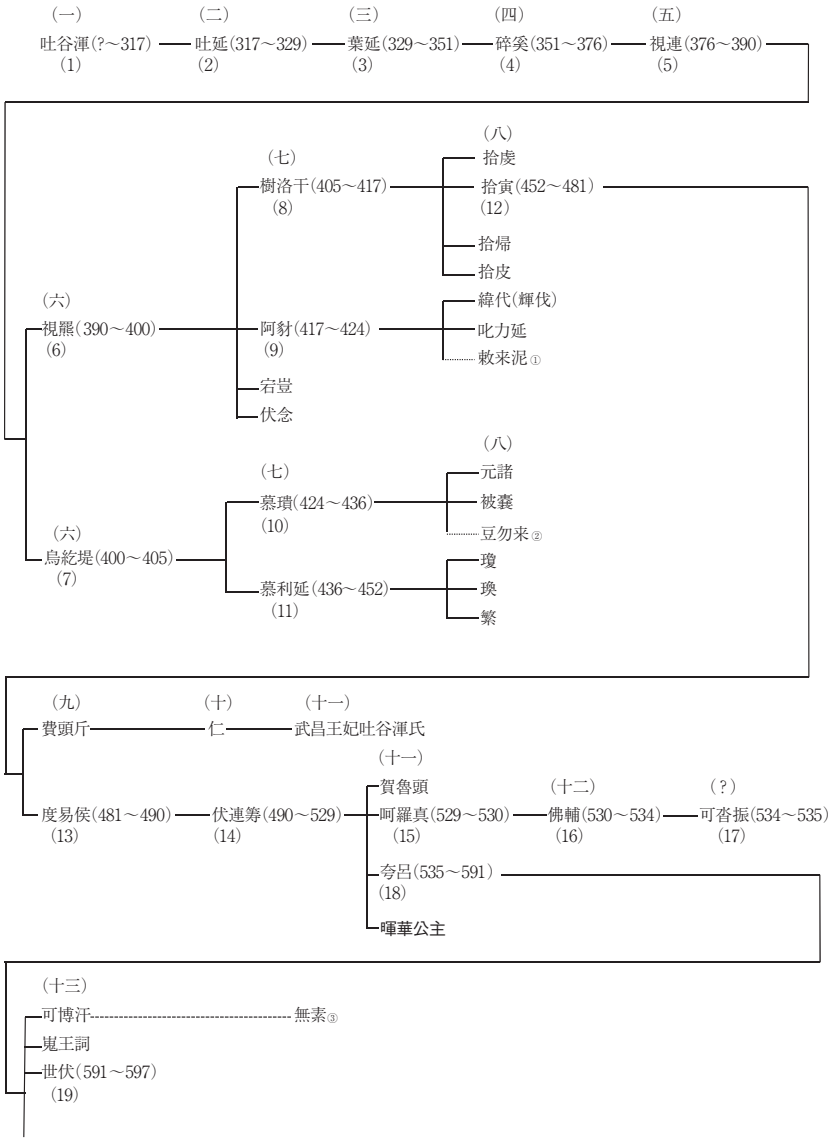
梶：梶山智史 編『北朝隋代墓誌所在総合目録』明治大学東アジア石刻文物研究所、汲古書院、2013年。アラビア数字は本書の墓誌番号。

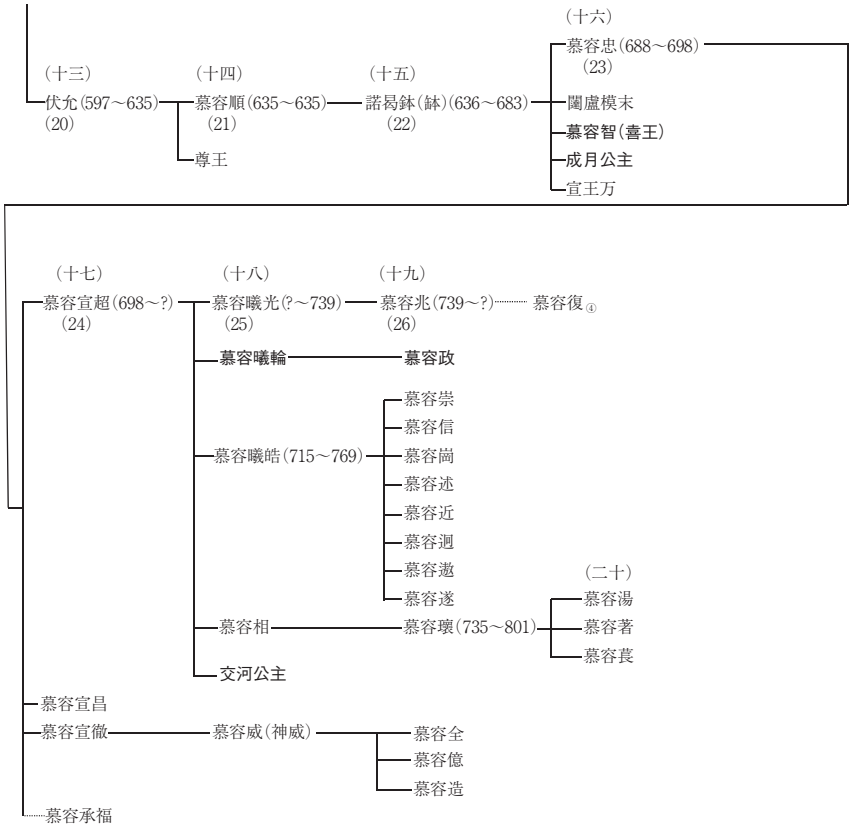
氣：氣賀澤保規 編『新編 唐代墓誌所在総合目録』明治大学東アジア石刻文物研究所、汲古書院、2017年。アラビア数字は本書の墓誌番号。

周：周偉洲 編著『吐谷渾資料輯録』（増訂本）、商務院書館、2017年。アラビア数字は本書の頁数。

延：延安市文物志編纂委員会 編『延安市文物志』陝西旅游出版社、2004年。アラビア数字は本書の頁数。

〔附録５：吐谷渾世系表〕


（一）
吐谷渾（?～317）
（1）
（二）
吐延（317～329）
（2）
（三）
葉延（329～351）
（3）
（四）
碎奚（351～376）
（4）
（五）
視連（376～390）
（5）
（六）
視羆（390～400）
（6）
（七）
樹洛干（405～417）
（8）
（八）
拾虔
拾寅（452～481）
（12）
拾帰
拾皮
阿豺（417～424）
（9）
緯代（輝伐）
叱力延
敕来泥①
宕豈
伏念
（六）
烏紇堤（400～405）
（7）
（七）
慕璝（424～436）
（10）
（八）
元諸
被囊
豆勿来②
慕利延（436～452）
（11）
瓊
瑍
繁
（九）
費頭斤
（十）
仁
（十一）
武昌王妃吐谷渾氏
（十一）
賀魯頭
呵羅真（529～530）
（15）
（十二）
佛輔（530～534）
（16）
（?）
可沓振（534～535）
（17）
度易侯（481～490）
（13）
伏連筹（490～529）
（14）
夸呂（535～591）
（18）
暉華公主
（十三）
可博汗
無素③
嵬王詞
世伏（591～597）
（19）



この表は正史・文集・墓誌等の史料に基づいて作成した。表内の横線は親子の継承を示し、縦線は兄弟の並列を示し、関係が不明な者は点線で表示した。人名の上の（ ）は世代の前後を示し、下の（ ）は王位継承順序を示し、人名の後ろの（ ）内の数字は、在位の年代を示す。

［注］

①『宋書』鮮卑吐谷渾伝に「阿豺その従子西強公吐谷渾敕来泥を遣わし土を拓くこと龍涸・平康に至らしむ。」という。つまり敕来泥は阿豺の従子だが、その父が誰か不明なので、仮に阿豺の下に附す。

②『魏書』巻六顕祖記に皇興四年「拾寅の従弟豆勿来……領する所を率いて降附す。」という。豆勿来については不明だが、仮に慕璝の後ろに附す。

③『隋書』吐谷渾伝に、開皇十一年、吐谷渾伏「その兄の子無素を使わして表を奉り藩を称す」と記す。無素の父は世伏の兄だが、関係が不明なので、仮に可博汗の後ろに附す。

④両『唐書』吐谷渾伝には、貞元十四年より慕容復に襲封させた。程なくして復は死に、「封嗣絶ゆ」とある。

【補注】

周偉洲『吐谷渾資料輯録』（増訂本）の「附録三 吐谷渾世系表」（378 ～ 379 頁）をもとに、本稿の内容に合わせ墓誌の情報を加えて作成した（ゴチック部分）。［注］については必要と思われるもののみ記した。